ソウルイーター～呪われし武具は狂気を超える～

三元新

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、とある平凡な暇をもて余した学生が死んで、神様（笑）に転生させてもらい、その世界ではっちゃけるお話。

※これは、作者が何となくアニメを見ていて書きたくなった、息抜き作品です。ですので、更新は気分次第なので不定期でございます。

それと、原作は全てアニメとほんの少しあるマンガ程度の知識しかありませんので、不愉快と思われるかもしれません。……なにより、マンガのストック及び知識が圧倒的に足りなくて殆ど更新はできないと思います。

それでも、いいぜ！……と言う人がいればどうぞ、ゆっくりしていってくださいね♪

目次

プロローグ ―― 1
0話　転生成功 ―― 4
1話　あれから時がたち…… ―― 8
2話　死武専と補修 ―― 18
3話　マカ&ソウルVS箱型の恐禍（フィア・イン・キューブ）
35
4話　死武専に入ります♪ ―― 55
5話　死武専での自己紹介？ ―― 62
6話　黒き者と紅き者 ―― 78
7話　ご挨拶 ―― 90
8話　妖刀 ―― 99
9話 ―― 117

プロローグ

「ここは…何処だ…？おれは、たしか散歩していて……どうしたんだっけ？」

『ここは、神の間じゃ。お主は死んでしまい、ここに流れ着いたのじゃ。』

おれは何となく下らない考えをしていたら、突然背後から声が聞こえてきたので慌てて振り向いた。

すると、そこには白髪で髭がとても長く、片目に眼帯を付けた老人がいた。

……なんだろう。この老人は。普通ならなにこいつ？って思う所だけれども、生憎俺事態も異常者だ。小さい頃から、普通の人には見えない者が見えたり、触れたり、時にはその者と戦ったり、友達になったりしたりした。……いや、実際両親じたいが人ならざる者と戦う人達だったっていうのもあるけれども、それでも異常と言えよう。

まぁ、そんな俺に愛情をめいいっぱい与えてくれたのはとても嬉しかったけどね♪……その代わり、スゴい過保護と化したけれども。はぁ～…。

『……いままでお主の人生を見てきて、実際にこうして会って見たのじゃが…お主も苦労人じゃのう』

おれの人生はどうやら神様？も嘆くレベルの苦労らしい。

「あはは、そ、そうなんだね～…。」

「と、ところでここってなに？……おれ、どうやって死んだの？」

『む？……そうじゃな～。ここはさっきも言ったが神の間。簡単に言うと天国と地獄のどちらかに行くための分かれ道にある場所じゃな。そして、お主の死因は、散歩中バナナの皮を踏んで滑った所でコンクリートの地面に頭を強打しそのまま死亡したのじゃ』

バナナェ……許すまじ…

「まぁ、いいや。死んでしまってのは仕方がないしね。」

『……む？随分と落ち着いているのじゃの。普通なら泣き叫んだり癇癪おこしたりするのにのぅ…』

「そんな事を言われても、さっきも言ったけど、おこったものはどうしようもできないし、それに、未練が無いとは言わないけども、それは俺の運がなかったんだな～と思うしかないしね。」
『……なるほどのう。お主みたいな人間は初めてじゃな。』
へ～、そうなんだね。
「そうなんだ。まぁ、俺は普通じゃないのは自覚しているしね。」
うん。だって、異形の者を沢山見てきてるしね。こんなんで、普通の人間なんて言わないよ。
『そうか……ふむ。ならお主――――転生してみたくはないかのう？』
「……転生？」
神様が突然とんでもないことを言ってきた。
『そう、転生じゃ。どうじゃ？やってみるか？』
「転生ねぇ～。うん。面白そうだしやってみたい！……で？どうやるの？」
『ふむ、それはのう。このルーレットを回すからお主はダーツを投げて刺さった場所に行くのじゃ。中にはお主の好きなアニメと言う世界がある。まぁ、これは運しだいじゃがな。さぁ！投げてみろ』
なんだか、随分と運任せなんだね。まぁ、その方が面白いけどさぁ～。
おれは、ダーツを持って、グルグルと回っているルーレットにむかい投げた。
ドスッ！
ダーツは刺さり、グルグルとルーレットの勢いは遅くなっていく。
そして止まると、刺さった場所は……
『ふむ、〝ソウルイーター〟の世界か。』
「ソウルイーターかぁ～。よりにもよって随分と危険な場所だよね～。少しマンガとアニメを見たことあるけど、殆ど知らないや…」
『なに、心配するな。特典は好きな数だけやろう。そもそも、今回の死はワシの責任じゃしな～』
おぉ～！やったぁ～！……ん？なんか聞き捨てならないこと

を聞いた気が……まぁ、いっか♪転生できるし！
『さて、どんな特典がいいかのう』
　ウーン……
「じゃぁ～……Ｃ３―シーキューブ―に出てくる呪いの道具の力全般と～、ＴｏＬｏｖｅるに出てくる〝金色のヤミ〟〝黒崎メア〟〝ネメシス〟の三人のトランス能力と…、あと、いろんな世界にある武具や想像の武具を作る程度の能力と、狂気や恐怖といった負の感情に耐えられる精神力と～、あとあと、そんな力を扱えるだけの才能かな？あとは、それを扱うためにトレーニングできる場所が欲しいかな。
　……できますか？」
『うむ、わかった。それにしよう。他の世界にある武具ということは、中には伝説の武具も入っておるな？なら、それに関しては、ワシがお主の産まれる家の中に巨大な図書館を設置しておくので、そこから見て作るがよいぞ。……で、次に容姿なのじゃが、お主はなににするのじゃ？』
「それは神様にお任せするよぉ～。なんでもいいしね」
　うん。この能力と力さえあればもう、なんでもいいや。
『そうか、わかった。ならもうないな？転生するぞ』
「うん、わかった。ありがとう、神様。……そう言えば、神様の名前ってなんなの？」
『……ワシの名前か？そう言えばいってなかったの～。ワシは北欧の最高神、オーディンじゃよ』
「オーディン様でしたか、うん。ありがとうございます、オーディン様。このご恩は一生忘れません！」
『ふふ、いいのじゃよ。……なら、転生するぞい！……どうか達者でのう』
　すると、俺の体が光だした。どうやら転生が始まったみたいだね。
「ありがとうございます！オーディン様。……また、何処かでお会いできたらいいですね♪……それでは、さようならぁ～」
　そうしておれは転生するのだった。

0話　転生成功

「……ぅん……む？……ここどこだ？――俺はいったいなにして……あぁ～、転生したんだっけ～。ふむ、どうやら、転生？成功したの～かな？」

俺はひとりブツブツと何処かの部屋で呟きながら、部屋の中を見渡していた。

……ん？なんか、声が女の子の様な高い声が聞こえたんだけども…気のせいか？

「あぁ～♪あ～♪」

……ふむ。どおやら気のせいではないようだ。てか、おれはいったいどんな姿に……

すると、部屋の隅に大きな長方形の鏡があったので、俺はその鏡を見た。すると、そこに写っていたものは――

あの、〝C３―シーキューブ―〟にでてくるヒロインのひとり、フィア・イン・キューブその人だった。

「……ん？……んん!?……ど、どういう事ですかぁぁ!?な、なんでフィアが鏡に！……いや、まてよ…まさかぁ……」

俺は両腕を上げてバンザイした。すると、鏡の中にうつっているフィアもバンザイする。今度は違うポーズをとると、同じポーズをとった。更に、いろいろ体を動かしながら、いろんなポーズをやってみたが、どれもまったく同じ動きで同じポーズをしていた。

……うん。

「まさかの、姿がこの人なのねぇ……」　ガクッ　ｏｒｚ

俺がひとり嘆いていると、ふと目の前に、一枚の半分に折り畳まれた紙があるのに気がついた。

俺はそれをとり開いた。

『やぁやぁ、久しぶりじゃのう。オーディンじゃ。この手紙を読んでいるということは、転生は無事に成功したようじゃの！……たまに失敗して次元の狭間に落ちる時があるから心配したのじゃが、よかったぞい。

どうじゃ？その姿は驚いたかのう♪
お主はそのキャラが好きなようじゃったから、その姿をチョイスしたぞい。
あ、因みにその姿ではわからないじゃろうが、男の子じゃぞ。――いや、男の娘じゃな！
男の娘の仲間入り、おめでとう!!』
ここで手紙？の内容は終わっていた。それも、最後の行の文字だけ出かでかと太字で書いていたのだ。
死ね！オーディン!!何が男の娘の仲間入りじゃい！どうせなら、何故いっそのこと普通の女の子にしなかったし、男の娘じゃないていいじゃないか！
すると、その手紙の下にもう一枚の手紙らしきものが落ちていた。
「えぇ～と、次はなに？」
『まぁ、冗談はさておき……、お主には〝トランス能力〟があるからのう。この能力は、原作同様、体をいろんな武器に変えることも、サイコダイブすることも、別の姿になることもできる。それに、自身の体を変換することも、別人に変身することも可能じゃが、性別や種族そのものも、変換することができるようになっておるぞい。ざっくり説明すると、どんな姿にでもどんな物でも変身することができるってわけじゃな。
次に、呪われた武具や伝説の武具に関しては、お主の脳内に情報をいれておるので、脳内検索の能力を使い探してみておくのじゃ。更に、お主の身体能力じゃが、この世界にいる〝シュタイン博士〟という人物のレベルまで上げたぞい。因みに鍛えれば鍛えるほど強くなるから、世界最強も簡単になるじゃろうな。
更に特別に、お主が前世でハマっていた〝東方ｐｒｏｊｅｃｔ〟というゲームの登場人物の〝程度の能力〟を全て使えるようにしておいたから、存分に使うがよい。
あと、その〝程度の能力〟のひとつであるスキマにはお主の知っている、呪われた武具と伝説の武具を幾つか入れておるので、存分に使うがよいぞい。因みに其々の武具にある〝呪い〟や〝デメリット〟

はお主には効かぬし、〝制限〟もないので完璧にその武具の力や能力を引き出し扱える事ができるぞい。因みにこれは呪いや伝説の武具だけではなく、この世に存在する全ての武具に当てはまるぞい。
ちなみにじゃが、呪われた武具を含めた伝説の武具に関しては、お主の記憶にあるアニメやゲームやライトノベルといった、二次元の世界に存在する武具じゃから、もし造りたいものがあれば、部屋の中にある本棚に武具を造るレシピ本があるから、それを見ながら、〝ドラクエ〟に出てくる〝錬金釜〟が部屋の中にあるので、それを使いいろいろ造ってみるとよいぞ。
最後に、狂気に関してじゃが……この世界に狂気を与え、恐怖のドン底に叩き落とした〝阿修羅〟という人物がいるじゃろう？その人物が持っている狂気を調べたのじゃがのう……。実は、お主の今の姿である〝フィア・イン・キューブ〟と比べると、桁違いに狂気が少ないのじゃ。つまり、別に狂気事態はお主の方が上じゃから阿修羅の狂気は効かないのじゃよ。
それでも、一応、狂気の共鳴をしては面倒なので狂気の無効化を付けたが、付けても付けなくても、呪われた武具であるお主事態に効かぬの思っておるが、用心はすることじゃな。
ちなみに何故、〝阿修羅〟の狂気と〝フィア・イン・キューブ〟の狂気がそれほどまでに差がひらいておるのかと言うとな？　まぁ、理由は至極簡単でのう…生きて狂気を含んだ数が、たったの数十年と数百年という歴史の差が一番の勝因なのじゃな。そもそも、フィアという呪われた武具　事態は、阿修羅と違い人の手によって呪われた武器と化した物じゃ。そもそも最初から生きた人ではなかったから阿修羅の様に退治され封印される事がなく、更にその者が持っておる〝呪い〟のせいで、フィアに触れた所持者達はひたすら人を無差別に殺しており、その殺された者の怨念が数百年も溜まれば、イヤでも〝阿修羅〟程度の狂気を超えるわい。たったひとりが生んだ狂気と数えきれない程の多くの人々の怨念から出来た狂気と比べれば、そりゃ～勿論、後者が勝つだろうのぅ…。
まぁ、そんぐらいじゃな。あと、いまは原作開始から十年前じゃか

ら、その間に鍛えるとよいぞい。
お主には血の繋がった家族がその家におるからのう。あとで見に行くとよい。これを読めば生まれてから今の時までの記憶を思い出すぞい。
あぁ～、あと、お主の両親は武器職人と相棒の武器でそんな二人の間に生まれたお主は武器職人であり武器でもある、ハイブリットじゃからな。ちなみにじゃがお主の事を転生者だということは知っておるぞい。
ちなみにお主の両親は〝死武専〟におる〝死神〟とは旧知の仲じゃから、死神とお主は知り合いじゃな。
それでわのぅ～。いい忘れておったが、ここはお主が見たことのある〝ソウルイーター〟だが、原作とは関係のない、〝ソウルイーター〟と似たような世界じゃからのう。……といっても、まったく同じじゃが、さっきも言ったが原作とは関係がないので、お主の好きなようにしてよいぞい。それでは、第2の人生存分に楽しむのじゃ！
ちなみにじゃが、手紙を全て読み終えると消えるぞい！』
ボウッ！
俺が読み終わると、手紙が燃えた。……てか、チートだぁ～。超チートだぁ～。……怖ぇ～。
まぁ、オーディン様。本当にありがとうございます！
そんな事を思っていると、いままでの記憶が甦ってきた。
「……さてと、取りあえず自由に家のなかをうろちょろしておこうかな～♪」
こうして、俺の新たな人生（転生後）がいま始まるのだった。
てか、次元の狭間に落ちるとか…、怖いなおい!?

1話　あれから時がたち……

―無　side―

ここは、とある大きな街の一角。……ここでは夜な夜な不気味な笑い声と共に、誰かの悲鳴が聞こえるという。そして、聞こえた次の日には、路地には大量の血痕が見つかると言うのだ…。

……そんな物騒な街の一角。その中に、ひとりの少女が歩いていた。

綺麗な水色の長い髪を風になびかせながら、悠々と薄暗い街の夜道を歩いていた。

最近は謎の声と悲鳴、そして大量の血痕といったものがあり、日が落ちて夜になると、街の人々は一切家から出なくなる。そのため、街は異様に静かで不気味な雰囲気を醸し出している。

そんな街を歩く少女は、可笑しな人物か、なにも知らないのか、……または、この〝事件の犯人〟だというのだろう。

しかし、少女はその〝事件の犯人〟ではない。

何故なら――――――

『グゥフェへへ……ウマそウナ人間ガイるゾィ』

少女の歩いている路地にある建物の一角、その屋根の上に四つん場になりながら、両腕には籠手に鉤爪が付いた物を装着し、ズボンにはナイフの様な物を腰に何個も付けていて、背中には二本の剣を背負っている奇妙な格好をした、半裸の男が長い舌を出しながら、その少女を舐めまわすように見ていた。

――そう、この男こそ、ここ最近の事件の犯人……『残虐のメイジェン』である。

この男は元々、とある有名な殺人犯だったが、あるとき警官に捕まっていた。しかし、この男は警官を殺めてその魂を食らい、魂の味を覚えた男は次々にその警察署にいる警官の魂を食らった。その建物内にいた警官たちを食べると、男はそのまま外にでて、いろんな街を通り人間の魂を喰らいながら、最近この街に来たのだ。男はこの街でも夜になると、目にはいった人間を脅し追いかけ、人間で遊んだあ

と、殺しその魂を喰らうといった事を繰り返していた。
そんな魂を喰らう薄汚れた人間の事を鬼神……になる前の人間の魂を、〝鬼神の卵〟と言うのだ。
そんな鬼神の卵と化した男は、夜道を歩く少女に視線を送り、今日の獲物を捕らえていた。
男は、今日の獲物はどの様に遊んで殺してあげようか……なんて考えをしながら少女を見ていた。
そして男が行動に移した。
男は綺麗に音をたてずに建物の屋根を伝っていく。男は少女の背後の斜め上にある建物の上に着いた。男は、ニタァ…と邪悪な笑みを浮かばせながら、背に背負っていた二本の剣を掴みそのまま空に跳んだ。
「モラッタァ…！」
男が剣をその少女の頭に突き刺そうとした……
その時――――――
「二十番機構・斬式大刀態《凌遅の鉈》 カース、コーリング！」
ズバァンッ！
「エ…？」
少女を殺そうとした男は突然、少女から出てきた巨大な鉈によって真っ二つに切られたのだった。
男は声もろくに上げられないまま、体が消えて、赤い魂だけがその場に残ったのだった。
「……ふぅ…」
すると、男に狙われていた少女が一息ついた。少女は己が出した武器を消し、その場に残った男の魂を、その赤紫色の瞳でジーっと見ている。
ジーっと見ていた少女は魂を手でわし掴んで、その魂を……飲み込んだ。
「……ゴクン……うん。鬼神の魂、回収完了」
少女はそう言いながら、小さくガッツポーズをした。そして、その赤い瞳はキラキラと輝いている様に見えた。

「それにしても、あれから十何年か～。時が進むのは早いねぇ～」
そんな言葉を発する少女。
そう、この綺麗な水色の髪で赤紫色の目の少女は、この世界に転生した別世界の人間にして、この世界の主人公である。
〝フィア・キューブリック〟の容姿をもった主人公である。因みに、この世界でも〝フィア・イン・キューブ〟や〝フィア・キューブリック〟と名のっており、更に、両親が日本人なので、日本名は〝夜知　楓〟となっている。
そう、この両親の名前は、父親の姿が夜知春亮、母親の姿が村正このは。二人とも、とある世界の重要人物だった者だ。
更に、この二人も転生者で、偶々ルーレットで選んだ世界がここで、同じくくじ引きで選んだ容姿がこの二人だったのだ。
因みに、本当の名前は、父親が夜知　昴に母親が夜知　桜である。
そんな二人の転生者の間に生まれたのが夜知　楓であるのだ。二人とも自分の生まれた子供が、偶々見たことのあったキャラの姿で、更に転生者だと聞かされた時は大変驚いていたようだ。
……しかし、この両親を侮るなかれ。
なんと、この両親は二人ともかなりのアニメオタクであり、前世の時に偶々　一緒に死んで、更に偶々同じ世界に転生した人物でもある。そのためか、やたらと意気投合しあい、そして二人は愛し合い結婚して子供を生んだのだ。
そんな二人が自分達の姿と同じ世界のキャラの転生者が生まれたとしよう。……そんな二人がその子供を気味悪がるか？――いな！そんな訳がない！　寧ろ溺愛する!!　てか、どんな理由があれど、自分の子供を愛さない方が可笑しいぜ!!……と、その二人の親は神に熱く言い切ったというのだ。
それからというもの、後からこの世界に生まれ落ちた転生者である夜知　楓を溺愛する、親バカへと変わり果てたのだ。おかげで、すくすくと少女は育ち、心優しく家族や友達以外、容赦のない純粋な子供へと変わったのだった。……そして、前世の性格や記憶は転生してから数年かけて消されるため、神様と出会って転生するときの事は覚え

ているが、死ぬ前の事は完全に記憶から消されていて覚えていない。
その為に、親バカの両親が溺愛するばかりに純粋な子供へと育て、異性同士の交わりといった、性知識はみな皆無となっているのだ。
……更に困ったことに、この夜知　楓と言う少女は、少女の姿をした少年であると同時に、見た目が小さな子供なのに、年齢は１６才だというのだ。更に困ったことに、ただの少女ならいいが、よりにもよって、この少女はかなりの美少女に入る分類であり、口から始まってンで終わる変態紳士にとっては、格好の獲物であるのだ。
そう、見た目に騙されたら痛い目をみるのがいまの御約束となっているのだ。
さて、そんな少女な見た目の少年だが、現在武器職人　兼　武器として活躍している。
……それと、親バカの楓の両親だが、見た目によらず世界最高峰の武器職人とその武器であることは、気づいていない楓。
楓いわく、せいぜい死神様よりも少し弱い程度と思っているらしい。（それでも充分スゴいが…）
実際は、死武専にいる死神と同等かそれ以上だと、死神本人が言っていた。なにせ、夜知　楓の両親が転生した時期は、まだ死神が現役で鬼神が生まれまれる前の時代だったのだから。それはもう、強いのは当たり前だ…。転生特典は身体能力の上昇と馬鹿げた知能と才能、そして二人の大好きな東方ｐｒｏｊｅｃｔの〝程度の能力〟だけなのだから。ちなみに、狂気に関しては、自身の肉体である〝呪いが効かない体〟と〝狂気を司る程度の能力〟を知識と才能で作り上げて、無効化している。
その為、楓の狂気も、楓が持っている呪われた武器もごく自然に何事も無いように扱う事ができる。
そんな二人の間に生まれた楓は、自身の能力を使いながら、鬼神の卵狩りをしていた。本人はいまでも充分に強いが、何時かは両親を越えて二人を守るのが夢らしい。……そんな言葉を言っていた所を影で見ていて聞いた両親がその日嬉しすぎで大泣きしていたのは楓は知らない。

因にだが、ある日　夜知夫婦が自分の息子　楓に転生特典の能力を聞いたときに、その特典のチート具合を聞いて、若干頬を引きつらせながら苦笑していたのは記憶に新しい。
さて、そろそろ主人公に変わろうか。じゃないと、私の言葉を聞いた所で面白くないからね。
……さぁ、どんな物語を私に見せてくれるのか楽しませてくれよ、夜知　楓くん？

―ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

―楓　ｓｉｄｅ―
さて、鬼神の魂の回収も終わったし帰ろうかな。
……ブルリ
なっ、なんだ!?……なんか、何処からか私の噂をしていた気配がしたんだけども…。……？気のせいかな？
いや、噂をする人物は、せいぜい私の両親かな？あの二人はいまだスゴく仲良くて、一緒のベットで寝ているし、すっごくＬＯＶＥラブなんだよ。……でも、たまに夜中トイレに行くのに目が覚めて、両親の部屋の前に通るとき、部屋の中から　ギシギシとベットのきしむ音と甘い声？が聞こえてくるのは何故だろう？しかも、そんな音が聞こえた次の日には、二人ともすっごく肌が艶々している気がするの。……いったい何をしているんだろうね。
まぁ、お父様もお母様も嬉しそうだし気にしなくていいよね！
あ、そうだ。お父様とお母様についてだけど、二人とも、私の知っている人だったんだよ、まぁ、簡単に言うと私の姿と同じ世界にいたキャラの姿ってことなんどけどね。ちなみに、二人とも転生者だそうだよ？転生してくれた神様が、私と同じオーディンさてだったらしいのだ。……そのあと、気になって確認すると、オーディン様いわく世界は何億という無限にある世界からルーレットで決まるため、同じ世界に三人も転生者が入るのと、更に血の通った家族として転生して暮らすのは、まずあり得なくて、過去にも前例が無いとのことなのだ。
あと、今後もこの世界には転生者が来るのかと聞いたら、もう、こ

の世界はルーレットの中から消されているため転生者はこの三人しかいないとの事だ。ちなみにだが、三人もいる時点でおかしいのだそうだ。

まぁ、そんなこんなで楽しく暮らしている夜知　楓こと私です♪

……え？さっきから気になっていたけど、なぜ私なのだって？お前は男だろ？……そんなのわかっていますよ。私だって最初は俺だと言ってましたよ？でもね、お母様とお父様に強制的に口調を変えられたのですよ。ましてや、子供の私に出来ることなんてありません。……そのまま折れて、いまにいたるのです。

ちなみにですが、家庭の強さは、お母様〉私〉お父様で、戦闘で強いのはお父様〉お母様〉私の順です。

私の両親はすっごくついて強くて、私の憧れであり目標でもあるのです。

どこまで強いのかは知りませんが、死武専にいる死神様に近いくらいだと信じていますです！

ちなみに、お父様が武器職人でお母様が武器なんだよ！　お母様はとある有名な妖刀なんだけど、お父様は呪いが効かない体を持っていて、お母様を自由自在に扱う事ができるの。それに、お母様は妖刀以外にも、日本に存在する武器ならば何でも変身することができるの。でも、確りとしたその武器の形や特徴や能力をイメージしないと失敗するんだって。でも、一度でも成功すると、あとは無意識にでも変身できるんだって！

ねっね？スゴいでしょ？　お父様もお母様も。二人とも私の大切な家族で、自慢の家族なんだよ！

さてと、それぐらいかな？……そう言えば、私は誰に向かって説明していたんだろう？……まぁ、いっか♪

「たっだいまぁ～」

私は家の玄関を開けて入る。すると――

「おっ帰りィイ!!」

ガバァッ！

「うわっととと…ただいまぁ～、お母様。あと、嬉しいのはわかりまし

たから、いちいち飛び込んで抱きつかないでくださいよ。痛いです。抱きしめたいなら優しくしてくださいよぉ～」

お母様が私をその豊富な胸に抱きしめながらも、私は言った。

「あ、あらあら、ご免なさいね。つい嬉しくってね。……はっ！そうだ！怪我はない？変な人に絡まれてない？怪しいオッサンに誘われなかった？変態さんは近づいてこなかった？身体を触れられなかった？それに――」

お母様が早口に一気にいろんな質問をしてくる。いつもながら、スゴい過保護だ。途中なにいっているのかわからないけれども、スゴく心配してくれているのはわかる。……内心スゴく愛されて嬉しいのは内緒だ。だって言ったら余計愛が振り撒かれるし、なにより、私が恥ずかしいもん／／／

「うん、大丈夫だから、落ち着いてお母様。今日はなにか大事な話があるのでしょう？だから、落ち着いて。ね？」

私がお母様を見ながらそう言った。するとお母様が渋々といった感じで離れた。

「そ、そうね／／／　楓ちゃんのいう通りね。お母さんが悪かったね。さぁ、リビングに行くよ。お父さんはもう待機しているから／／／（やだ、楓ちゃんのトロンとした上目使い――なんて可愛いのかしら！　オーディン様め、こんな可愛い子を私の身体に宿すなんて――――ありがとうございます！）」

なんだか、お母様の顔が赤い気がするの。あと、ちょっと悪寒がしたのは気のせいかな？

そんな事を思いながら私はお母様に連れられてリビングにきた。いまは、見慣れた風景だが、私の家はかなりの豪邸で、お城の様な感じだ。しかも、ちゃんと日本らしく和式の豪邸も隣に建ててある。ここは、山の中なので、近所に家はない。あるのは湖と川と近くに海があるだけだ。

そんな豪邸のリビングではソファーにお父様が座っていた。お母様がお父様の右隣に座り、私がお父様とお母様に向かい合う様に座った。

「今日はお前に話さなければならないことがある。」
　すると、お父様が話をしだした。
「お前は私達二人が武器職人と武器だと言うのは知っているな？」
「はい、知っています。お父様」
「うん。なら話は早い。いま武器職人になるには、俺の旧友が経営している〝死武専〟に入学してもらう。まぁ、旧友って言っても、一度お前を死武専に連れていって死神と会っているから知っていると思うがな」
　そう、私は五年前、お父様とお母様に連れられて死武専に来たことがあった。そこで死神様に合いお話ししてお友達になってくれたのだ。……そう言えば死神様には息子がいるんだっけ？一度会ってみたいな～。どんな子なんだろう？
　原作知識が殆ど無いのに消されているから、どんなものだったか、忘れちゃったよ～。
「はい、知っています」
「うん。まぁ、ここまで言えばわかると思うがな、楓には死武専に入学してもらう。それでいいな？」
「はい♪不安はありますが、お父様やお母様みたいな立派な武器職人と武器になるために、頑張ってきます！」
「おう、頑張れな。（オーディン様に頼んで俺と桜は原作知識を復活させて貰ってはいたが、まさかこんな時に役に立つとはな。……それにしても、原作突入か…。楓が危険じゃなければどうでもいいな！楓ならどんなことにも対応するし、戦闘において、そこらへんの武器職人や敵に遅れを取るような楓ではないしな。あとは、楓に寄り付く虫や変態どもを駆逐するだけだ……フフフ）」
　お父様は笑顔で返しきた。……ただ、なんだか笑顔に黒い何かがあるようなぁ…気のせいかなぁ？
「なら、準備をしなくちゃな。あ、そうだ。ひとついい忘れていた。向こうに行って住む家は、私達が以前お前が生まれる前に住んでいた別荘にしたぞ、丁度デスシティーにあるし、使わずに放置は良くないからな、そこに住んでいろ。

……更に、その家からこの家までは、ここリビングにある、そこのドアから自由に行ききできるぞ。転移魔方陣を組み込んで設計してあるからな。お前の魔力を通せば何時でも転移できる。魔力を通さなければ普通のドアだな。ちなみに向こうに繋がるドアは、同じくリビングのドアだな。だから、無闇に魔力を通せばここについてしまうので気をつけろよ？」

また、随分とスゴいものを作ったね。

「はい、ありがとうございます。お父様♪」

「うんうん、お前の為だ、これくらい余裕だ。なぁ、桜」

「えぇ、楓ちゃんの為ですもの。私達はスゴく心配ですし、辛くなったり寂しくなったら何時でもおいで、待っているからね」

お母様ぁ…

「はい、ありがとうございます。お母様」

「うふふ、いいのよぉ～♪」

「さて、入学は明日だ、今日はもう休んで確りと明日に備えるんだ。いいな？」

「はぁ～い」

「うん、それじゃ。ご飯にしようか。母さん」

「はい、今日の夕食は豚カツカレーですよ。カレーはスパイスから調合して作っていますのでオリジナルです」

「うわぁ～、美味しそう！いただきまぁ～す♪」

「美味しそうだな、いただきます」

パクっ

「――う～ん！　中で溢れる肉汁が、カレーのスパイスと絶妙に絡み合い、辛すぎず甘すぎず、絶妙な辛味でとってもいいハーモニーを醸し出して、美味しいよ！お母様♪」

「うん、美味しいな。さすが母さんだ。いつもながらプロ顔負けの腕だな。それに、前よりも腕を上げているな？スゴく美味しくなっているよ」

「ありがとう、二人とも。作る人として美味しくいただけるのはとても嬉しいわ。二人の美味しそうに食べている笑顔だけでも、幸せでお

腹がいっぱいね♪」
「いつもありがとう、お母様。……あのね、お母様」
「ん？なにかしら？」
「晩御飯の時だけここに来てもいいかな？……お母様のご飯を食べると元気が出るんだ。だから、ダメ？」
「――ッ！／／／ぜ、全然いいわよ！晩御飯だけとは言わずに朝もお昼もいいわよ！別に、私かお父さんの魔力を通しても開けれるから、別荘に行くのは簡単なのだしね♪　全然平気よ？お母さんは貴方の笑顔で元気が出るのだから♪（可愛い、可愛いよ！楓ちゃん！）」
「本当？やったぁ～♪ありがとう、お母様♪」
「えぇ、別にいいわよ。お礼なんてね♪さぁ、ご飯が冷めちゃうわ。温かいうちに食べちゃいなさい」
「はぁ～い♪」
　私達はそんな他愛のない会話をしながらいつも通りの日常を過ごすのだった。そして、そのあと私は食器を片付けてお風呂にゆっくりつかっていた。
　明日は五年ぶりの死武専。死神様は元気かなぁ～？楽しみだね♪早く明日が来ないのかな？
　そんな事を思いながら、私はお風呂から上がり、パジャマに着替えて布団にもぐって、眠りに着いたのだった。

2話　死武専と補修

―楓（フィア）　ｓｉｄｅ―

さて、私はいま死武専――の前にある巨大なとてつもなく長～い階段の前にいます。

「うん。相変わらずだけども、階段長いね～。はぁ…呪うぞ…」

おっと、また〝呪うぞ〟なんて言っちゃった。……どうやら、私は神様に転生したときこの姿に変えてもらえたのだが、もともと、アニメでも〝呪うぞ〟といった口癖を言っていた。その影響か、私はいつの間にかこの口癖が出てきていた。それに、お煎餅もとても美味しく感じてしまい、大好きだ。

そんな事を考えて歩いていると、ふとあることに気がついた。

「……私、能力で空飛べたよね。なんでいままで気がつかなかったのかな？」

そう、私の貰った特典の中の、東方の〝程度の能力〟で〝空を飛ぶ程度の能力〟があるのだ。

私はそう思い、そく実行した。

……ふわっ

私は宙に浮いて、そのままゆったりと階段の頂上まで飛んでいった。

しばらく飛んで、頂上までたどり着くと、そこにあった建物は死神様のドクロを形とったものがいっぱいある独特な感じの建物だ。

……それが死武専だ。

「ふむ。いつみても、やっぱり変な建物だよね～。まぁ、死神様が作った建物みたいだし、変にもなるのかな？」

さて、こんなのんびりとしてられないね。さっさと死神様にご挨拶しなくちゃ。

――――――でも…

「……どこだっけ？」

あれ？……本当にどこだっけ～？

まぁ、とりあえず入ろう。

……さて、とりあえず入ったのはいいげどぉ～
「迷った…（泣）」
……もう、なんでこんなにも広いのさ…もともと過去に2回しかきたことがないのに、何処に行けばいいのさぁ～……グスン
「もぉ～……ここどこぉ～…」
いい加減泣くぞこのやろぉ～……
「グスン…あ！……ここにいるなら、死神様の気配を探してそれを追えば良いじゃんか…」
なんで今頃になって気がついたんだろう…。
「……はぁ、呪うぞ……まぁ、そうと決まれば即実行だね」
私は、死神様の気配を探した。……すると、死神様の気配を見つけたので、私はスキマの能力を使い直接死神様の所へと向かったのだった。
ブゥウン！
「――やっほぉ～！死神様～♪来たよ～」
ヒュー……スタン…
私は空から落ちながら死神様の目の前に静かに綺麗に着地した。
「おぉ～、おっ久さしぶり～、楓ちゃん。や～っと来たのね～ん。待ちくたびれたよ～ん」
「死神様も相変わらずお元気そうで何よりだぞ！」
「私は元気だよ～。君のご両親は元気～？」

「いつも通り元気ですよ。そしてラブラブだぞ。いつも毎日が楽しそうで、見ているこっちも楽しくなるぞ！」
「そうかそうか～。相変わらずなんだね～あの二人は～。」
「はい、そうなのですよ。」
「いや～、そ～れにしても、君は何度みても女の子にしか見えないね～。最後に会った時よりも、可愛くなっているんじゃなぁ～い？君は本当に男の子なの～？」
「し、失礼な!!そんな事ないです！絶対にないです!!　私はちゃんと男の子です！……だって付いてるもん。」
　死神様は私にたいしてとても失礼な事を言ってきた。……確かにさ、確かに年齢を重ねる度に男らしくなると思ったら、更に美少女へとなっていってるよ？でもね、これでも、ちゃんと男の子なんだよ。……だって、ちゃんと〝ピー〟も付いてるもん！
「まぁ、そんなことはどうでもいいけどさ～。調子はどうだ～い？」
「調子…ですか？いつも通りですかね。つまり絶好調なのですよ！」
　私がそう言うと、なんだか閃いた顔をした――気がした。（だって、死神様の顔って表情の変化がないのですもの……）
　そう言えば、ここに来てから全く入学の話をしないけれども、いつするのかな？
「ならさ～。ある生徒の補修を手伝ってくれるかい？」
　……ん？
「補修…ですか？……誰です？その補修の対象って？」
「それはね～……」
　ピロロンピロロン…
　すると、突然鏡が波紋がうつように光だした。
「死神様～電話ですよ～。」
　そう、死神様のお部屋の中にある大きな鏡は、世界中の鏡に繋がっており、〝４２４２５６４〟と鏡に書くとここの部屋にある鏡に繋がるのだ。
「じゃ～、隠れてますね？まだ学生じゃありませんし、この姿は目立つので～」

私はそう言い、空中に浮いた。すると、一人の生徒が入って来てたので、私は気配を完全に消して部屋の天井に逆さまに張りついて下を見ていた。
「ハロハロ、死神様。マカ・アルバーン、ソウルイーター、来ました。」
「入って来てもいいよ～。」
すると、遠くの方でまた誰かが入って来たようだ。
……それにしても、何故先に入ってきていた男子は鎖鎌を持ってあんな所にいるのだろう。
それにしても、なんで鳥居みたいな形のやつにギロチンが付いるのかな？
お？……なんか暗殺其の一とか叫びだした。いやいや、暗殺するならもっと気配と声を隠そうよ。……暗殺の意味ないじゃん。
……あ、やっぱりバレた。しかもなんか、俺がビックすぎてバレちまったぜなんて、おかしな事を言ってるし…。――まぁ、その本人が楽しそうならとやかく言うつもりはないかな？
しばらくして、男子二人と女子二人の計四人が死神様の前に立っていた。
「君たちはやってもらいたいことがあるのよ～」
「「「なんですか？」」」
「それは～――ほ・しゅ・う♪」
その言葉で大変あわてている四人。……それもそうだ。みんな補修を受けるなんて思っていなかったのだろう。とくに、マカ・アルバーンって言った少女はかなり慌てている。
「じゃ～、君たち職人のやる事は？～」
「はい。人の道から外れた鬼神の魂９９個と１個の魔女の魂を回収して、死神様の武器　デスサイズを作ることです。」
「そうだね～。でも、君たちの集めた魂は０個じゃん？」
ガーーン!?
その一言で、ブラック☆スターという男子以外はみんな真っ白になってしまった。
そんなブラック☆スターは呑気にしていて、死神様のチョップをく

らいピュ～っと血を噴いていた。
「で、君たちにやってもらいたい仕事は、シド先生の事なんだけど～」
どうやらいまから補修の内容を言うようだ。
「確かに、シド先生は生前はシブめないい先生だったんだけど～、ゾンビになって死の恐怖から解放された先生は生徒にも同じ経験をさせようとして、襲っているはた迷惑で自己満足な行動をしているわけなのよ～。
しかも、シド先生をゾンビ化して操っている人物が裏で糸をひいているのは確かだね～」
その言葉に、ブラック☆スターは復活してボコボコにすればいいんだろ！っと言って復活した。
「別に脅かす訳じゃないんだけど、もし、この補修を落とすようであれば、みんなで退学ね」
「「た、退学ぅぅぅ!!?」」
死神様の言葉に更に真っ白になるブラック☆スター以外のメンバー。ブラック☆スターは相変わらず呑気に笑っている。
「……あぁ～、そうだ。もうひとつ言うのを忘れていたよ」
すると、死神様はまだあるようで、四人に話をしだした。
「これは、噂なんだけど、ここ近くにある呪われた武器がいるそうなんだ。」
なんだろう?その武器って――まさか！
「もしも、近くにいる場合もあるから、気をつけてね～」
すると、死神様が此方をチラッと見てきた。……なるほど、それがここにいる死武専の生徒の〝補修〟なのですね…
「それじゃ、失礼します…死神様……」
ズーンとしながら部屋を出ていく三人と最後まで元気だった一人。
私は天井から降りて死神様の前にきた。
「死神様、最後の話……私がそれの対象なのですね。」
「そうだよ～、因みに、シド先生もゾンビ化して操っているっていった人物も私が頼んだんだよ～。その人物は、シュタイン博士だよ～ん」
「……えぇ～、めんどくさい人が補修の対象ですね～」

「因にだけど、まだシュタイン博士には君の事は言ってないよ～。まぁ、彼の事だから自力で調べそうだけど～」
「まぁ、あの人は強いし賢いからね～。」
「そうだね～。それと、やっぱり今回は補修はいいよ。きっと彼等はシュタイン君とのバトルでボロボロになるだろ～しね～。あの子達の補修が終わったそれから、何かの仕事で、君と戦わせる事にするけれど～、頼めるかぁ～い？」
　死神様が、そう聞いてきた。
「それは勿論――――よろこんで♪」
　ブオォォン！
　私はスキマを開いた。
「それでは、また後で死神様～！……あ、そうだ。なんかまた一人ここの部屋に入って来たようだよ？気配的には貴方に似ているね。それじゃ～ね～」
　ブゥン！
　私はスキマの中に入り消えたのだった。
―ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―
―死神　ｓｉｄｅ―
「それじゃ～ね～」
　ブゥン！
　私の目の前で、少女のような少年がスキマというものに入り消えた。
「相変わらず、常識はずれの力だね～。……まぁ、あの二人の息子？だから仕方がないのかな？」
　そんな事を思いながら、先程までいた少年…フィアを思うのだった。

―ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

―楓　ｓｉｄｅ―
さて、ここは何処だろう？……何処かの研究所？――むぅ～、わか

んないなぁ～。
カツカツカツ…
おや？どおやらお客さんの様だ。……足音は～四人だね…。
私は近くの森に避難して、そこにある一番大きな木上から千里眼で見ていた。
どおやら、やって来たのは補修組の四人だ。……シド先生と思われしゾンビが縄を巻かれて縛られていた。
「ここが、シュタインとかいう奴の住居か！」
ブラック☆スターが叫んでいた。
四人がなにかを話していたら……
ガラガラガラ――
なにかが転がってくる音が、研究所の入り口から聞こえてくる。
ゴクリと飲むかんじがここからでも千里眼で見える。それほど緊張が高まっている様だ…。
そして…
ガンっ！
「あいて!?」
出てきたのはシュタイン博士。……しかし、コロコロの椅子で来たのはいいが、入り口の手前で転けて盛大に頭から落ちた。――とても痛そうだ…
また、同じことを挑戦していたが、結果は同じことだった。
そのあと、シュタインは四人に向かい合うようにしていた。
さて、そろそろ戦闘開始となるのかな？
「君たちの魂の波長は随分と安定してませんね。片方は捻くれ者で皮肉な魂で真面目で頑張りやさんな魂、共鳴しているようでしていない」
「なに？生き物の魂が見えるのか？」
「しかも、魂の性質まで見えるなんて、超一流の職人よ」
シュタイン博士はああ見えても、最強の天才　武器職人だからね～。その程度の事は、朝飯前ですから。
それにしても、先程喋った、マカ・アルバーンとソウルイーターの

二人は改めて見ると、随分と面白い魂ですね。――それに、彼ら四人には、とても大きな〝運命〟を背負っているようだ…
「俺は俺の魂が見えていたらそれでいい!!」
バンッ!
「はっはっはっはっ!君はスゴいな～、物凄く自己主張の激しい魂だ。……君の魂にあうパートナーはいないんじゃない？」
私が深く考えていたうちに、話が進んでいたようだ。
「ひゃっはー!!」
ブラック☆スターがシュタイン博士に突っ込んだ。
ドンッ!ドンッ!ガンっ!!
ブラック☆スターは攻撃するが、シュタイン博士はコロコロの椅子に座ったままブラック☆スターを殴り飛ばした。
「ブラック☆スター!?」
すると、一人のポニーテールの女子が叫ぶ。
「……おや？はは、なるほど。君が彼の武器か…。君の魂は人を受け入れる器がとても大きい。君が彼の魂の波長に合わしているのか…。」
シュタインがまた魂を見破った。
「誰だお前…」
ソウルイーターがシュタイン博士に聞いた。
「さ～てね。データーは取れたし…実験の開始と行きますか…。」
シュタインは不気味な笑みを浮かべながらそう言いはなつ。
そこに、マカ・アルバーンと鎌に変身したソウルイーターがシュタインに突撃する。
「鎌職人のマカ……鎌職人のマカ……」
そう呟きながらも椅子に座った状態で鎌の攻撃を避けるシュタイン。
後ろからブラック☆スターが攻撃しようとしたが、その前に後ろ頭で顔に頭突きをさせる。
「鎌職人のマカ……何処かで聞いたことが――――」
「あっ!きみ、スピリット先輩の娘さんですか？……」

そんな話をしながらも、また更に不気味に微笑むシュタイン博士。
すると、シュタイン博士が椅子に座ったままマカの方へと走る速さで椅子を動かした。
「マカ、ただの掌底だ。防御するぞ！」
「えぇ、わかってる！」
ガンっ！　グッ、バチン！
「ぐはぁっ!?」
「きゃっ!?」
マカはシュタインの掌底を防ぐが何かに弾き飛ばされた。
「あぁ～、シュタインの掌底はただの衝撃じゃないのに。あの人は、魂の波長を直接相手に撃ち込むことができる、天才なんだよね～。
普通なら、武器に物理的な攻撃は勿論のこと、魂の波長を増幅してぶつけるもの。けれど、シュタインは武器を使わずに、魂の波長を直接相手に撃ち込むことができるんだよ。それにより、相手の内側に攻撃を通すことができるんだよね～。……まぁ、それぐらいなら私もできるけれどね。」
そんな事を思っていたら――――
「メガネかち割るぞお前ぇぇ!!俺様を無視するなよ!!」
「無駄だよ」
ブラック☆スターが椅子からたったシュタインに突撃した。
てかいつのまにマカは捕まっていたの？
「魂に直接、波長を撃ち込めるのがお前だけだと思うなよ!!」
「必殺！黒星ビックウェーブ!!」
ズドンっ！　ゴゥ!!
ブラック☆スターが肘打ちの要領で、馬鹿げた魂の波長をシュタインにぶつけた。
シュタインの魂の波長によりできる物は、電撃の様な黄色でバチバチとしているが、ブラック☆スターのは最早ドーム状になって爆発した様な感じになっていた。
「あのブラック☆スターとかいった男子。桁外れな魂の要領を持っていて、更に魂の波長を撃ち込むことに関しては天才の様だね。でも―

─」
　相手が悪かったね…
「これは驚いた。」
　シュタインとブラック☆スターにはとても大きな差がある。
　それは───キャリア…つまり経験だ。
　ブラック☆スターがシュタインの背後をとって馬鹿げた魂の波長をぶつけたのはいいけれど、それぐらいなら相殺できる。
「君の魂の性質はチェックしました。魂の波長さえ分かれば僕の方で合わすことができる。同じ魂の波長が重なれば、攻撃力はゼロになり、なんのダメージもない。君が俺に魂の波長をぶつけた瞬間合わせた。いわば、君と俺は武器と職人の関係になったのさ。」
　シュタインの魂は観察・対応・柔軟性に優れた魂。それこそ、シュタインの強みなのだ。
「今度はこっちからいかせてもらいますよ…」
　ダッ！タッタッタッタッ!!
　シュタインがブラック☆スターに向かって走りだし、両手をブラック☆スターの頭の左右に離れて挟むように手を向けると───
　バリバリバリバリ!!!!
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
　先程よりも強力な魂の波長を頭から流すシュタイン。
　ここからでも、かなり強力なものだとわかる。
「ブラック☆スター!!」
「やめろぉぉぉ!!」
　仲間が叫ぶがシュタインはその手を止めない。
「うわぁぁぁぁぁぁぁ───……」
　バリバリ───シュン…
　シュ～……ドシャッ！
　ブラック☆スターは血を吐きながら、地面に後ろ向きで倒れた。
「ブラック☆スター…」
　急いで側によったソウルはブラック☆スターを眺めていた。
　ギコ…ギコ…ギコ……

シュタインは頭に付いているネジを回して突っ立っている。
そういえば、シュタインの頭のネジってどうなっているんだろうね？……フランケンシュタインみたいな感じなのかな？……あの頭のネジって…
シド先生を捕まえていたブラック☆スターの武器、椿の方を見るとかなり狼狽していた。
「椿、俺は逃げも隠れもしない男だった。だから行ってやれ…」
シド先生は逃げないから行ってこいと椿に言った。椿はそれに返事して、ブラック☆スターに急いで駆け寄った。
「シュタイン、てめぇー、許さねぇ！マカ、行くぞ！」
ソウルがマカに言うが、マカは目を見開いて固まっていた。
「うそ…」
へなへなへな……トサ…
マカは腰を抜かしたように、へなへなへなと落ちていき、座った。
「あ？どうした!!」
「――見えちゃった…」
――――！……へぇ、魂をその歳で見れるようになったんだ。流石、最強のデスサイズの娘ですね～。
「どうやら魂が見えたようだね…」
シュタインも、不適な笑みでマカを見ていた。
「うそ、レベルが違いすぎる」
マカはまるで絶望しきった顔をしていた。
「無理…勝てない…」
マカは顔を伏せてしまった。
「どうした、何やってんだよ！確りしろぉ！」
ソウルがマカの肩を掴むが…
バシンッ！
マカがその手を振り払った。
「うるさい！ソウルには魂が見えないからそんな事を言ってるのよ!!」
「それがなんだって言うんだよ！お前が見えたのはただの魂だろ!?未

来が見えた訳じゃねぇ！戦う前から諦めてどうするんだよ！
お前は俺を最強のデスサイズにするんだろ！女ったらしのエロ親父をギャフンといわせるんだろ！顔を上げろいま、俺が喋ってるんだ!!」
ソウルの言葉に反応して、顔を上げるマカ・アルバーン。
「アイツを見てみろよ…」
ソウルがシュタインの方を見ながらマカにそう言う。
「あいつはお前がグズグズしてんのに、待ってくれてるんだ。結構いいやつじゃねぇ～かよ」
すると、マカはソウルの顔を見る。そして、二人で少し笑いあった。
「よし、クールに行こうぜ？」
マカは立ち上がる。
「ごめんソウル。手間かけさせた。」
「あいよ！」
ピカッ！
ソウルイーターが鎌になり、マカがそれを掴む。
ビュンビュンビュンビュン…
チャキィィン！
「「魂の共鳴!!」」
魂の共鳴…職人が武器に魂の波長を送り、それを武器が増幅させまた職人に波長を送り返す。それによって強大な魂の波長を生み出すことができる。
「うおおおおおおお!!!!」
「限界まで共鳴させるぞ！」
「うん！」
――――っ!?へぇ～…あの二人……
「一撃にかけるつもりだね？」
「おおおおおおおおお!!!!」
「こい！お前らの魂見せてみろ！」
シュタインがマカとソウルに向かって叫ぶ。
「鎌職人、伝統の大技！」

マカの鎌が魂の波長で三日月型の形に変わった
「魔女狩りぃぃぃ！」
ガガガガガガガガガガ――ガンっ!!
魔女狩りをシュタインが両手で白刃取りの様にして止めた。
「驚いた…、魔女狩りをここまで制御できるなんて……」
「うあぁぁぁぁ!!」
パキンッ
シュタインのメガネに罅が入る。
「しかし、まだ荒い!!」
パキャァァン!!
「うぁっ！」
ドサッ…カラン、カランカラン…
マカとソウルはシュタインが魔女狩りを魂の波長を撃ち込み、力でねじ伏せたため、その衝撃により吹っ飛んだ。
マカの呼吸は荒く、とてもボロボロだ。
コツ…コツ…コツン
シュタインが倒れて動けないマカにゆっくりと近づいていく。
「辛うじて意識はあるようだね……ん？」
すると、倒れているマカを庇うように人間に戻ったソウルがシュタインを睨む。
「俺の職人に手出しはさせねぇ！」
「それでは君から……」
そういいながら、シュタインがソウルの頭に手を伸ばして――
「合格点をあげましょう」
「「え？」」
その言葉に、驚いて固まるマカとソウル。
「補修授業お終いでーす。」
「え？」
また、ソウルがシュタインに意味がわからないといった視線を向ける。
「職人を身をていして守るなんて…良いですね～」

「あの、もう一度言うけど……え？」
また、ソウルがシュタインに聞く。
「いやね～、頼まれたんですよ。死神様に。君たちの補修をやってくれって…」
「でも、ブラック☆スター殺したじゃん！」
ソウルが椿に膝枕されながら倒れているブラック☆スターに指を指す…
「面白いこと言うなおめー…」
だが、ブラック☆スターはそれに反応して返した。
「……生きてる」
なかなか、酷いことを言うソウル。まぁ、端から見れば殺した様にも見えますしね…しかたがないっちゃしかたがないんだけれども…。
「じゃー、シド先生は?!」
「いや～、わるかったな、お前ら。俺は人を騙さない男だったんだが～…それも生前の話だ」
シド先生は汗を一粒流しながら困った様にそう言った。
「ふざけんな！なんだこのクソ話は！全部ドッキリかよぉぉぉぉぉ!!!」
ソウルが空に向かって叫んだ。
「……うぅ～…そんなぁ～…」
倒れているマカは泣いていた。
「ふふふ、それにしても、チビッ子をド突き回すのは楽しかったね～♪」
『サズスティックなのは本物か!?』
その場にいた者はみんな顔をヒクヒクさせながら、そう思ったのだった。
クルクルクル！ガッ！
シュタインがいきなり椅子を座ったまま回して急に止まった。
「さぁ、みんな。今日は疲れたろ？遠慮なく泊まっていきなさぁーい！」
「「絶対嫌だ！」」

全員同時にそう叫び、椿は苦笑していた。
――――ふぅ…、それにしても、今日のうちに補修をしようとしたけれど、止めておこうかな？
……どうせ、死神様は鏡でこの場を見ているんだろうし、今日はもう大丈夫でしょうね。
「なら、帰ろうかな…」
ブゥウン！
私はスキマを開き、また死神様の所に戻るのだった。
―ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

―死神　ｓｉｄｅ―
「それにしても、強くなったねぇ～」
私は、四人の補修を見ながらそう呟いた。
前まで、私の息子が見ていたのだが、助けに行くと言ってから、結局助けに行けなかったようだ。おそらく、また何処かで鬱になっているのだろう。
スタン…
「死神様～、戻って来ましたよ～」
どおやら、もう一人の補修を頼んだ人物…フィアちゃんが帰ってきたようだ。フィアちゃんは随分前に彼処に行ってから、ずっと様子を何処かで見ていたんだろう。
「やぁ～やぁ～、お疲れさぁ～ん！見ていてどうだった～？」
「死神様？見ていたならわかると思いますが、私は全く動いていないので疲れてませんよ？
まぁ、感想を言うなら、才能はありますが、まだまだ弱く、実力不足で青二才って所ですかね～。でも、四人とも凄く才能はありますね。――それに、大きな運命もね…」
大きな運命……確か、この子の能力の一つに運命を見る能力があったね～。
「運命を見たのかい？」
私が聞くと、フィアちゃんが頷いた。

「はい。断片的ですが、取り合えずわかったのは、これからとても大きな運命に巻き込まれるってのが視えました。それも、世界を巻き込むほどのね…」
「世界を巻き込むほどね～……それは、どういくことだい？」
私が質問をしたが、申し訳なさそうな顔をしてしまった。
「すみません。いくらこの運命を見る程度能力でも、私の実力がまだ不十分のせいで、そこまではわかりませんでした…」
シュン…となったフィアちゃんは可愛いなぁ～っと思ってしまった私は悪くないと思う。
「いいよいいよ～。そんだけでも視えただけでも凄いと思うからね～。それでも納得がいかないのなら、ここで学生生活をして頑張っていくといいよ～。君のご両親みたいにね～。」
私がそう言うと、顔を明るくして、やる気に満ちた瞳をしていた。
「はい！わかりました！こんな所でくよくよしていられませんね。お父様とお母様みたいな武器職人と武器になるため、私もこれからここで頑張って学ばさせてもらいます。
死神様。これからよろしくお願いしますね♪」
フィアちゃんの笑顔はとても眩しかった。
「うんうん。頑張ってちょ～！」
私はそんなフィアちゃんを応援することにした。
「そうだフィアちゃん。ここでは９９個の鬼神の卵の魂と１個の魔女の魂を回収して私の専用武器となるデスサイズにするんだけれど、君は既に実力や魂の数がデスサイズ並にあるから、君はこれからも、自分の意思で好きなようにしてきなよ。でも、あまり魂は刈りすぎないでね？生徒たちのものが無くなっちゃうからさ～」
そう、この子は既にデスサイズと同じ……いや、それ以上の力があるのだ。本人は自覚がないようだけども、それぐらいの実力は既に持っている。しかし、この子が目指している二人…つまり両親は、私達――死神八人衆をも越える武器職人と武器だから、そうとう頂にいるのだ。
彼らがいなければ、世界は狂気に包まれていただろう。彼らは私た

ちにとっても英雄なのだ。
　しかし、彼らは表舞台には滅多に出なかった。それはなぜか？――理由は簡単だ…彼らが目立つのを嫌ったからだ。まぁ、どちらにせよ、鬼神に関しては、一般市民や死武専の生徒や先生には知らない人が殆どだ…。むしろ、知っている人物の方が少ない。
「わかってますよ。それぐらいね。流石にここの生徒たちの迷惑にはしませんよ。……ですが、いくらなんでも、全て狩り尽くすのは不可能ですよ。人間に恐怖や狂気、不安や怒り、憎しみに悲しみ…といった負の感情や汚い欲望があるかぎり、人から外れた魂が無くなることなんてありませんからね～。……でなければ、このような呪われた武具が存在するわけありませんもの…」
　フィアちゃんは少し悲しそうにしながらそう言った。……確かにフィアちゃんの言う通り人間に負の感情や強欲があるかぎり、鬼神の卵の魂が無くなることがない。
「まぁ、フィアちゃんの言う通り無くなることはないけれども、それでもね～。まぁ、わかっているならこれ以上言わないけどね～。」
「はい。わかっていますよ。……あ、それではこれで失礼しますね？死神様。それでは～……あっととと、今回の補修の件ですがまた今度でお願いしますね。また、なにかクエスト的なものですればいいですよ？それぐらいなのでそれではさようならです」
　ブゥウン！
　フィアちゃんがスキマを使い、そのまま帰ってしまった。
　確かに、クエスト式なら簡単に彼らをフィアちゃんにぶつけることができる。
　彼らには、これからの為にも、フィアちゃんと戦って少しでも実力をつけてもらいたいね。
　……さて、どんなクエストにしようかな？
―ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

3話　マカ＆ソウルＶＳ箱型の恐禍（フィア・イン・キューブ）

―マカ・アルバーン　ｓｉｄｅ―

私の名前はマカ・アルバーン。死武専に所属している１３才の女の子。相棒は鎌の〝ソウル＝イーター〟。つまり、私は鎌職人なの。私の父は死神様の武器デスサイズで、母は父をデスサイズにしたんだけども、父の浮気性が酷くて離婚。私の親権は母になっているの。

さて、私の自己紹介は終わった所でいまの話をするね？

いま、私達は死神様に呼ばれてデスルームにいるの。メンバーは、私にソウル、ブラック☆スターに椿ちゃん、デス・ザ・キッドにトンプソン姉妹の３組が来ているの。

――――あ、そういえばここまでの経由を話していなかったね。なぜ、このメンバーなのかというと……

私達は死神様の補習を受けたあと、シュタイン博士が私達のクラスの先生になり、その数日後、死神様の息子――デス・ザ・キッドが死武専の生徒になって、ソウルとブラック☆スターがデス・ザ・キッド君と戦って敗北した。――それから、三日後の今日、突然このメンバーが死神様に呼ばれたんだよ。

「なぁ、マカ。なんで俺達呼ばれたんだよ…。まさか、また補習とか言うんじゃないだろうな…」

私の隣を歩いているソウルが質問してきた。

「それはないと思うよ？だって、私達の補習はあれが最後だって死神様が言ってたし。それに、今回は本当に急な呼び出しだから、もしかしたら何か大切なお仕事をするのかもしれないよ？」

「なるほどな…。確かに、前みたいな感じじゃなかったからな。今日のシュタイン博士もなんかピリピリとしてたし」

……そう、何故か、いつもニコニコとおかしな解剖ばかりしているシュタイン博士が、今日は私達を死神様の所へ行ってこい…と言ってから今日の授業はナシだと言って何処かにいってしまった。

「まぁ、あいつの考えている事なんてわかるはずがないからな。正直どうでもいいが、早く終わらせたいものだ…」
　そんな事を話しているうちに私達は死神様のいるデスルームについた。
「死神様、マカ・アルバーン以下7名来ました。」
　私達はデスルームに入った。暫くギロチンの下を歩いていると、死神様のいる広場にきた。そこには大きな鏡があり、そこには死神様とお父さんのスピリット＝アルバーン、そしてシュタイン博士の三人がそろっていた。
　そんなメンバーに私達はスゴく驚いていた。
「やぁ～やぁ～、みなさぁ～ん。や～っときたんだねぇ～。」
　死神様が私達に向かっていつものしゃべり方で話してきた。
「死神様、今回は何故呼ばれたのですか？」
　すると、死神様が少しの間黙った。
「実はね～、君たちにある仕事をしてほしいのよ～。」
「仕事…ですか？」
「そう、実はね～。君達には、とある人物の魂を刈ってほしいのよぉ～。」
　ある人物の魂…
「その人物はねぇ～。ほら、マカちゃん達の補修の時に、〝呪われた武器がいるから気をつけてね～〟なんていってたでしょ～？」
　……そう言えば、言ってたような～言ってなかったような～？
「で～、その人物の特徴なんだけれども～、水色の髪に血のような赤い瞳をもった、武器なのよ。でもねぇ～、その人物はあまりにも多くの人の魂を、鬼神の魂や善人の魂関係なく奪ってきたせいで、この世で最も鬼神に近い人物だと言われているのよぉ～。だからさぁ～、君達にはこの人物を速急に速やかに狩ってほしいのよぉ～。」
　――そ、そんな人物がいるんだ…。でもまって――
「あの、死神様。何故そんな危険な人物を私達が？……それなら、確実にシュタイン博士や他の三ツ星武器職人の人達の方が――」
　私が言う前に、死神様が話をする。

「それはねぇ～、シュタイン君には別の仕事があるのよぉ～。他の、三ツ星武器職人の人達にも同様の仕事があって、動けるのが死武専の生徒だけなのねぇ～、それで～、その中でも優秀な君たちに頼みたいと思ってねぇ～。やれるかぁ～い？」
　死神様の言葉に私達は強く頷いた。
「はい！そのお仕事、私達が引き受けます！」
「だな、ＣＯＯＬにその魂を刈ってきてやるぜ、死神のおっさん」
「ヒャァッハァァァ！この俺様よりも上の奴なんて存在しないぃ!!
そんな奴なんか、このビックな俺様が狩って死神の旦那に渡してやるぜぇ～！ひゃっはははは！」
「頑張ろうね。ブラック☆スター」
「ふむ、父上の直接の依頼だ。キッチリカッチリ、その任務を遂行しようでわないか」
「はぁ～、大丈夫なのか？このメンバー」
「あはははは！大丈夫なわけないじゃぁ～ん、お姉ちゃ～ん♪」
　それぞれが、思い思いの感想をいった。
「それじゃぁ～、がぁ～んばってねぇ～！あ、そうだぁ～、ここの町に現れたと情報が出てきたからさぁ～、その町に行ってみなよぉ～。何か情報が得られるかもしれないからさぁ～」
「はい、死神様。それでは、行ってきます！」
　こうして、私達は鬼神狩りに出かけるのだった。

　あれから、死神様に貰った地図を頼りにその鬼神の魂を持つ武器がいると言われる町に私達はきた。
「へぇ～、ここが〝イズモシティー〟なのか。……随分とおかしな建物が多いいな。……これは日本の村の様な町だな」
　ソウルの言葉に私は頷いた。
「そうね、どうやら死神様から貰った地図によると、この町は日本からきた人が建てた町らしいよ？……なんでも、その時の風習がありこのような日本の和式の建物が多く残っているみたいね。」
　そんなどうこうしているうちに、どうやら私達は異空間の様な世界

にでものみこまれてしまったようだ。
何故ならそれほどまでに、淀んだ重い空気と紫色の空が不気味に輝いていたのだから
「な、なに!?なにがおきたの！」
私が叫ぶと――
カラン…コロン…カラン…コロン…カラン…コロン
――と、下駄の様な足音が聞こえてきた。
私達は足音のする方へと視線を向けた。するとそこには――――
―
少女がいた…
その少女は、キラキラとした輝く水色の長い髪を靡かせ、瞳は血よりも赤い…紅い瞳をしていた。
「……あなた達は…だれ？」
少女が私達に向かって聞いてくる。
「俺達はぁ～、お前の魂を狩りにきた奴だぜ!!椿、モード鎖鎌！」
「はい！」
ジャラン。
ブラック☆スターが叫ぶと椿ちゃんが二刀の鎌に鎖が付いた鎖鎌になった。
「先手必勝！」
ブラック☆スターが少女に向かって跳んだ。
ドンッ！　ズガァァァン!!!
少女はブラック☆スターに蹴り飛ばされ、近くの家に突っ込んだ。木で出来た家だったので、そのまま家は崩れ落ちたのだ。
「ちょっ！ブラック☆スター！いきなり何をしてるのよ！もしも、いまの女の子がここに住む人だったら――」
「いや、彼女は恐らく父上の言ってた人物だろう」
私が言い切る前にキッド君に被された。
「どうして？」
「さっき……、彼女はブラック☆スターが蹴り込む瞬間、少し後ろに飛んで蹴りの威力を軽減したからな。……少なくても、いまのブラック

☆スターの一撃は本気だった。いまの蹴りはまともにくらえば只ではおかないはず。でも、彼女は平気なようだ」
ドゴォン!!
すると、崩れ落ちた家が吹き飛び、中からさっき蹴り飛ばされた少女が〝無傷〟で立っていた。
「あの少女。いまの攻撃を交わしたとはいえ無傷だとは。……これは、俺達も真面目にした方がいいようだな。いくぞ、リズ・パティ!」
「おう」
「あはは♪」
キッド君が叫び、リズ・パティの二人が2丁拳銃になって、キッド君が器用に拳銃を逆さまにして持つ。
「私達もいくよ!ソウル!」
「おう!いつでもいいぜ、マカ!」
私はソウルの手をとり、ソウルが鎌に変身して私は鎌を器用にクルクル回して両手で持つ。
「さぁ、お前の魂――いただくよ!」
これで私達の完全な戦闘準備が整った。
「……君たちは…職人?……そして、死武専の生徒?……へぇ~、そうなのかぁ~…フフフ」
すると、目の前にいる少女が不気味に笑いだした。
「……そっか、そっかぁ~。死武専の生徒なんだね~。なら、私の魂を狩りにきたのかな?かな?……随分と嘗められたものだよね~…」
すると、空気が突然重くなった。
「……あ、そういえばまだ自己紹介をしていなかったよね…。私の名前は〝フィア・イン・キューブ〟ただの武器です…よろしくね?そして――あなた達のお名前は…なに?」
少女…フィアが私達に問いかけてきた。
「――私の名前はマカ・アルバーン。武器は鎌の〝ソウル=イーター〟で、鎌職人よ!」
「俺様の名前はブラック☆スター!神を越える男だ!!武器は椿だ!――

―そして、いまからお前の魂を狩る男だ。覚えてろ！」
「俺の名前はデス・ザ・キッド。相棒はリズとパティの２丁拳銃だ。それに俺は死武専を作った死神の息子でもある。覚えていろ」
私達が名乗ると、フィアという少女は何処か満足げにしていた。
「……そう。わかった、覚えておく。……それでは早く始めよう？―
――魂の狩り合いをね♪」
フィアの言葉と同時に、私達の戦いが始まった。

ここはデスルーム…。その場所には三人の人物？がいた。
そう、死神・シュタイン・スピリットの三人だ。
「死神様。……あの子達は彼女――いえ、彼相手に勝てるのでしょうか…」
シュタインが死神に問う。
「んん～とねぇ……。まぁ、無理だろ～ね～。彼――〝姫神　楓〟こと〝フィア〟ちゃんは私が知るなかでも最強の二人の間に産まれた子供…。そんな二人を超えようと日々頑張っている、とぉ～ても明るくて優しくて、心の強い子だよぉ～。
そんな彼はねぇ～、私が知るなかでも特に強い武器職人　兼　武器の子供だよぉ～。君達にもいま初めて言うけどさぁ～、彼…既にデスサイズと同レベルの強さを持っているよぉ～」
死神の言葉に驚くシュタイン。シュタインも何度か死神と一緒にフィアに会っているためある程度は知っていたのだが、そこまで強いとは正直思っていなかったのだ。――だが、シュタインともあろう者がなぜフィアの実力を見切る事ができなかったのか…。それはその筈……フィアは自分で自分の〝魂の実力〟を偽装することができるからだ。それにより、その容姿も合って、弱く見えるのだ。そこため、武器職人として天才のシュタインでさえも、フィアは騙す事ができるのだ。
そんな二人の会話に入れていない男が一人……いや、入れないのではない――そもそも入ってすらいないのだ。
「マガァァァ！そんな奴に負けるなぁぁ!!そのまま魂を狩ってしま

えええ!!」
　涙を大量に流しながらも呪詛の様にデスルームにある大きな鏡に写る、マカ達とフィアの戦いを見ているこの男――名前はスピリット＝アルバーン。死神様の武器である〝デスサイズ〟。その中でも〝最強のデスサイズ〟と呼ばれている。
　――そして、マカ・アルバーンの実の父親である。
「君は少し煩いよ、黙ってなさい」
　死神はスピリットに注意をするが……
「だっでぇ～、うちのマカが傷物にざれぢまうんでずよおぉぉぉ!!」
「……」スッ…
　ドンッ!――シュゥゥゥ…
「あんまり煩いと、脳天直撃　死神チョップをくらわすよぉ～?」
「くらわす前に言ってください…」
　スピリットは死神の直伝　死神チョップにより沈んだ。
　実は、このスピリット＝アルバーン。この人も何度かフィアに会っているのだ。デスサイズは基本的に死神の近くにいる。他にもデスサイズはいるが、各支部にいるために死武専にいるのはこの人物だけだ。
　そのため、何度かフィアとも会っていてスピリット本人もフィアの事は好きなのだが…、等のフィア本人はスピリットを避けている。何故かというのは、スピリット本人に影響がある。この男はとても女好きで浮気性だ。そのため、マカの母である人と離婚をしている程だ。その性格のせいで娘のマカに嫌われている。
　そして、フィアは前にも話したがとても純粋だ。そのためか、かなり人の感覚には敏感で、特に邪な考えを持つ人間に関してはかなり敏感である。そのためその中に入っていたスピリットを避けているのだ。
　そしてもうひとつ避けている理由があり、それは過去にフィアは母親である〝姫神　桜〟と死神に会いに死武専に遊びに来ていたのだ。その時のフィアはまだ5歳――そう、まだスピリットが奥さんと別れておらず、娘のマカに好かれていた時期だ。

そんなときに遊びに来ていた二人の親子。デスルームには、死神とスピリットとシュタインの三人がいた。その時に、三人に挨拶をした桜が、スピリットに口説かれていたのをフィアは母親と手を繋いでいたため隣で見ていたのだ。勿論、確りと自我があるので、何を言っているのかはわかっていないが〝口説いている〟という事はわかっていたのだ。

それを確りと覚えているため、これを踏まえてフィアはスピリットを故意的に避けるのだ。

そんなスピリットを余所に死神とシュタインは鏡に写る、3組の武器職人とフィアの戦いをマジマジと見ていた。

「フィアちゃんに頼んであの3組と戦ってもらっているけれど、彼らは何処までフィアちゃんに対抗できるのかねぇ～」

「彼らなら、大丈夫でしょう。マカやブラック☆スター…それにキッド君もみんな才能が溢れている。勝てなくても、良いところまではいくでしょう」

死神の言葉に返したシュタイン。死神とシュタインはお互い見たあと、小さく微笑んだ。……死神はわからないが…

「まぁ～、あの子達には今後の為にも頑張ってもらわなくちゃいけないからねぇ～。頑張ってねぇ～」

「そうですね。彼らはきっと頑張ってくれるでしょう。僕と戦った時のようにね…」

フィアと真剣に戦っているマカ達を見ながら、二人は真面目に見ていたのだった

―マカ　ｓｉｄｅ―

あれから何分たったんだろう…。

いま、私達は其々の武器を持って目の前にいる人物と戦っているのだが、一向に武器を当てることすら出来ていない。全ての私達の攻撃が〝素手〟で防がれているからだ。

私が鎌を降り下ろせば器用に手で反らしながら避けて、ブラック☆スターが鎖鎌で連撃を繰り出せば手で鎖鎌を弾きながら攻撃をいな

す。更にキッド君が２丁拳銃で連射すれば、まるで優雅に舞う舞姫の様に綺麗に避けていく。さっきからそればかりだ…。フィアは武器をひとつも使わず素手で私達と戦って――――いや、遊んでいた。
『くっそ！なんだコイツ！俺達の攻撃があたらねぇ！』
鎌に変身しているソウルが悪態をついた。
「ほんと、なんでこんなに上手いのよ。……私達の攻撃がまったくあたらない」
なんでこんなにできるの？――――これが、鬼神にもっとも近い存在だというの…
魂の形が〝見えない〟し、こんなの初めてたよ…
「くそぉ～！なんであたらねぇ～んだ！いいかげんあたりやがれ！」
『落ち着いて、ブラック☆スター！必ず勝機があるは、それまで落ち着いて』
「そうだ、椿の言う通り、どんな事にも必ず隙が生まれる。その隙が生まれた瞬間こそ俺達の勝機だ。それまで我慢だ」
ブラック☆スターを椿ちゃんとキッド君が止めていた。そんな二人の姿をじっと見ていたフィアが口を開く。
「……隙――それは弱者が生むもの……どんなに強いと自慢する者でもひとつの隙で自分よりも弱い者に負ける……でもそれは、その者が慢心したから……慢心は本当の強者がするものではない……それは強者の皮を被った弱者である……真の強者と呼ばれる者は慢心などしない。……慢心は己の心と身体を弱くする……慢心はバカのすることだから……慢心することにより、自分の限界を付けて…それ以上強くなることをしない……だから、弱いまま…だから負ける……真の強者は限界を付けない……だから…いつまでも限界を超えていき…更に強くなる……故に…隙も生まれない……逆に自らわざと隙を作り、それを突こうとした弱者を返り討ちにする……それ故に、常に強者でい続ける。
……君たちは、どちらの人間なの…かな？」
またフィアは不思議そうに私達を見ていた。
「……まぁ、いいや…興味ないから……さぁ、続きしよ？

……もっと――もっと楽しませてよ！♪」
ヒュンッ！
突然フィアのスピードが上がり消えた。
「遅いの！」
「なっ――」
ガンッ！
「きゃぁぁぁ!!」
私は飛ばされた。
―side out―

―無　side―
「きゃぁぁぁ!!」
ズガァァァン…
「マカッ！――くそが！」
マカが飛ばされ激昂するブラック☆スター。
ブラック☆スターは鎖鎌を持ってフィアに向かって走る。
しかし、フィアはブラック☆スターを見ながらも不気味に微笑んだ。
「……ブラック☆スター？――遅いね♪」
――フッ
また消えるフィア。
だが、ブラック☆スターは慌てず回りを見て……
スッ――ガキィン！
「――へぇ～……気づいたんだ～」
ブラック☆スターはフィアの背後からの攻撃をなんなくと止めた。
「あたり前だ！このブラック☆スターがお前のようなちんけな気配を辿れないわけが――」
ブラック☆スターが後ろを向きながら一瞬で背後にいたフィアを切り裂くが……
「わけが……なに？」
だが、ブラック☆スターが切ったものはただの丸太だった。

「なｎ――」
ズドン！　ドカァァン!!
ブラック☆スターは言い切る前にフィアに蹴り飛ばされた…。この間の攻撃速度は僅か3秒。フィアがブラック☆スターの背後からブラック☆スターを蹴り飛ばすまでの時間だ…
たったの3秒でブラック☆スターは負けたのだ。
「……あとは、貴方だけ……」
フィアは最後に残ったキッドに向かい合って、指を指した。
そんな様子に顔には出していないが、内心凄く慌てているキッド…
「(な…なんだあいつは！あのブラック☆スターにマカがこうもアッサリとやられるなんて……しかも、ただの素手でここまでやれるのか！――もしも、武器を持ったらどれほどまでに強くなるのだ…)」
「……？……動かないの？……動かないのなら……――此方から行くよ？」
フィアが考えていて動かないキッドに向かって走りだす瞬間――
―
「『魔女狩りいいいいい!!!!!』」
光の刃がフィアを襲った。
「――ッ!?」
フィアはあまりにも突然の反応に遅れて光の刃に飲み込まれた。
――何故フィアが飲み込まれたのか……フィアは蹴り飛ばした二人の方も実は警戒していた。気配察知で確りと……しかし、それでもフィアは気づかなかった。……勿論だがフィアは全く油断していなかったのだ。それも、キッドに向かって走る瞬間まで……
しかし、フィアは避けれなかった。何故なら――
あの走る瞬間の僅か1秒で鎌職人　伝統の大技
――『魔女狩り』を完成させたのだから
そのあまりにの早さに流石のフィアでも避ける事ができなかったのだ。――それもその筈、魔女狩りを撃つため〝魂の共鳴〟をして完成してからが1秒だが…、それを撃つための間を〝合わせて〟僅が1秒だったのだから。

「――ッ！はぁ…はぁ…」
マカは流石に無茶をしたのか、疲れとダメージもあり肩で息をしていた。
その状態からも、鎌を棒の様に使い立っていた。
「おらぁぁ！」
ズドン！
すると、マカの隣の家に飛ばされたブラック☆スターも復活した。
二人ともそれなりのダメージは負っているものの、動けない程ではなかった。
そんな二人に駆け寄るキッド。三人は魔女狩りで飛ばされたフィアの方に視線を向けるのだった。
―ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

―マカ　ｓｉｄｅ―
私はなんとか、かなりの無茶をしながらも鎌職人の伝統の大技〝魔女狩り〟を放った。
何時もよりも早く撃つことを考えた為、かなり早く放てたかわりに威力は落ちた。……それでも、魔女なら大ダメージを負わせれる程度なのだが…。シュタイン博士レベルの人には、いまの私の魔女狩りではたとえ全力で放っても防がれる。これは補習の時にわかった事だ…。もし、もしもシュタイン博士と同レベルならいまからでも全力の魔女狩りを放つ為の準備をしても遅くないはずだ。
「ひゃっはっはっはっ！なんだなんだ？あいついねぇ～じゃねぇ～か！この俺様にビビって逃げたんだな～？」
「違うわよブラック☆スター！私が魔女狩りで飛ばしたの！恐らく、私の感が正しければもうすぐ来る――構えて！」
私がそう言った瞬間――
ズドオオオオオオオオオン!!!!!
フィアが飛ばされたであろう瓦礫の中から大きな爆発がおきて、瓦礫が全て吹き飛ばされた。
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ――

その中から、赤に近い紫色をしたオーラを全身から出しながら、右手には大きな〝鉈〟を持っていた。
「二十番機構・斬式大刀態《凌遅の鉈　》カース、コーリング」
な…なんなの…あれは……あ、あんな…あんな禍々しいオーラを放つ武器なんて初めて見た…
あれが…あの子の…武器……――ッ!?
――うそ…あの子の魂…見えちゃった…
「な、なんて……禍々しい魂なの……あんな形…見たことがない……」
マカが見えているフィアの魂――それは、とても禍々しいものだった。魔女や人や獣や等々、いろんな魂が合わさり混ざったかのようなんとも形状しがたい魂。
――それが、フィア・イン・キューブの魂だ。
そんな魂を見たマカは狼狽していたのだった。
「あんなの…あり得ないよ…」
どうして…、いったい幾つの魂を喰らったらあんな形になるの?――
――これは、早く絶対に狩らないと、危険だわ!
「いくよ…ソウル!」
『おう!いつでもいいぜ、マカ!』
「ブラック☆スター、キッド君。お願い…私が魔女狩りを発動するまで時間稼ぎをお願い!」
「わかった。いまはマカの言う通りにしよう。――あんな禍々しい魂を持ったものに、正直俺の〝デス・キャノン〟がくらうかわからないからな」
「わかったよ。俺様が時間稼ぎをしてやるんだ、絶対に成功しろよな、マカ!」
「うん!わかった!」
私は時間稼ぎをブラック☆スターとキッド君にお願いした。
「『魂の…共鳴!!』」
「『おおおおおおおおおおおお!!!!!!』」
ゴオオオオオオオオ!
私達の共鳴で、回りで風が起こっていた…。

「……潰します…」
ドンッ！
すると、こっちに気づいたフィアが大きな鉈を持ってこっちにきた。
だが――
「させん！」
ダンダンダンダンダン!!!!
「……む？」
チュインチュチン!!
キッド君が撃った弾を鉈で弾くが――
「ひゃっはぁーー！この俺様を忘れるなよ！」
ガキィン！
ギリギリギリギリ…
「……じゃま…」
ギャキィン！
「おわっととと……っとあぶねぇ～、もう少しで切られる所だったぜ！」
ブラック☆スターはフィアの鉈と鎖鎌で鍔迫り合いをしていたが、フィアが弾いた瞬間後ろに跳んで、ギリギリの所で鉈を回避した。
「……お前達…じゃまなのです…」
ドッ！――ガッ！
「ぐはぁっ!?」
ブラック☆スターがフィアに蹴られるが――
「……ぐふぅ…やっと捕まえたぜ！――椿！〝モード・忍者刀〟！」
『はい！』
シュルルル…パァン！
椿ちゃんは鎖鎌から忍者刀に変身した。
「いくぜぇぇ！〝スピード・スター〟！」
シュンッ！
ブラック☆スターが一瞬のうちに消えて、あちこちに走り回る。
「どうだ！俺様のスピードを！見破れｍ――」

「……えい…」
カァァァン！
「――〜〜ッ!?!!おおおおおふ!!」
フィアはブラック☆スターのスピードを見切り、ブラック☆スターが背後に近づいた瞬間、ブラック☆スターの股を目掛けて容赦なく足を降り上げた。
すると、上手いことに足がブラック☆スターの股に入り、男にとって、かなりの大ダメージをくらうことになったのだった。
「（な…なんと恐ろしい技なのだ…！）」
その時それを見ていたキッドは股を閉じながら、戦慄していたのだった。
「マ、マカ！あと何れぐらいかかる！」
キッドはマカにたずねる。
「あと、少し！」
その答えに答えたマカ。すると、キッドは連続で銃を射ち出した。
ダン！
「さぁ、こっちだ！」
キッドが射ち出す弾を難なくと鉈で器用に弾くフィア。しかし、全く距離は縮めないでいた。
すると、フィアが突然空に跳んだ。
キッドは跳んだフィアに標準を合わせるが……
「八番機構・砕式円環態《フランク王国の車輪刑　》カース、コーリング！」
青い魔方陣の様なものが出たと思えば、鉈がその魔方陣を潜ると、大きな車輪へと変形した。そして、車輪には立体鎖が付いていた。
流石にこれにはキッドも驚いていた。
「――はぁ！」
ガンッ！――ガガガガガガガガガ!!!!!
フィアが地面に向かって投げた車輪は、地面に衝突すると、進行方

向に高速回転しながら進んだ。丁度、その進行方向にいたキッドは緊急回避をしながらその車輪を避けるが――

「……ムダ…」

クンッ――ガガガガガガガガガガ!!!!!

フィアが立体鎖を引くと車輪が動き、向きを変えてキッドを狙う。

「……えい…たぁ…やぁ…せい…はぁ!」

地面に降りていたフィアは立体鎖を振り回すように動かし、車輪をキッドに走らせていた。そんキッドは、なんとか回避をしながらもフィアに向かって銃を射ち出していた――が、弾は全てフィアの操る立体鎖によって弾かれていたのだった。

「くそ!これではまともに戦えん!なんとかしてあの立体鎖を破壊しなければ…」

キッドが考えるが、なにも浮かばない。魂の共鳴をして必殺技である〝デス・ザ・キャノン〟を射ち出せばなんとかなるかもしれないが、チャージに時間がかかり、その前にあの車輪に殺られるのが落ちだろう……と考えていた。

しかし、フィアの持っている立体鎖は其々の武器を固定し操る鎖でもあるため、フィアの持っている武器よりも実は硬かったりするのだ。

だから、キッドの〝デス・ザ・キャノン〟程度では到底壊すことはできない。

「溜まった…――キッド!ブラック☆スター!」

――どうやら、マカの魔女狩りが溜まった様だ。ここからはマカに変わろう――

「おう!」

「わかった!離脱する!!」

私の叫びに反応して、直ぐさま避難したブラック☆スターとキッド君。

フィアはその反応に少し遅れたが私達に気づいて此方を向いた。

「……えい」

フィアが車輪をこっちに飛ばしてくるが――

「やぁーーー!!」
――ズバンッ！
車輪を真っ二つに切り裂いた。
「――――ッ!?」
フィアは今日一番の驚いた顔をした。どうやら切られるとは思っていなかったのだろう。
――そのおかげで隙が出来た。
私はチャンスだと思い、全力で魔女狩りを放つ。
「ハァァァァ!!!魔女狩りいいいいい!!!」
ズンッ――ズガガガガガガガガガガガ!!!!!!
私が放った魔女狩りは真っ直ぐフィアの方へと地面を切り裂きながら突き進む。
「いっけぇぇぇぇぇ!!!」
ズガガガガガガガガガ――――ズカァァン!!!
大きな音と共に、フィアに魔女狩りが直撃した。
「……やったのか？」
「たぶん、いまの攻撃で倒しているだろう。倒していなくても、いまのが直撃なのならば、重症はまちがいだろう」
もくもくと煙が上がりながら、そこを見ているソウルとキッド。私も、いまの攻撃は直撃したと思っているので、倒したと思う。――しかし、さっきから何故か違和感しか残っていないのだ…
すると――――
「十九番機構・抉式螺旋態《人体穿孔機》カース、コーリング！」
ブワァ！
その叫びと共に煙が吹き飛び、そこから服をボロボロにした〝軽傷〟程度のフィアがいた。
その右手には、全長１７８．７センチメートルの巨大なドリルを持っていた。
「……うん。ビックリした……あんなにも……威力があるなんて…思っていなかった……だから…私も…全力をだしてあげる」
そう言ったフィアがドリルを後ろに引きながら、腰を低くして構え

た。
「……魂の共鳴…『疾風・螺旋突き』」
グンッ！――――ゴガガガガガガガガガガ!!!
フィアが持っていたドリルが回転しだして、それを突くように前に突きだすと、先が尖った竜巻がドリルから放たれて、地面を削りながら私達に進んできた。
「やばい…――――ッ！」
私はさっきの魔女狩りで殆ど力を使いきってしまい立てなかった。
隣にいたソウルも鎌を解除して私を庇うように前にいたけれど、方膝をついて粗い息をしていた。
他の、ブラック☆スターやキッドも立っているのがやっとだった。
そうこうしている間にも竜巻が私達の方へと迫っていた。
「もう…だめ…。今度こそやられちゃう」
私が諦めの言葉を言うと…
「諦めるなマカ！お前が諦めたら意味がないだろ！他のブラック☆スターもキッドの野郎もまだ諦めてない！だから、お前も諦めるんじゃねぇ！」
そこへソウルが私に叫んだ。
――そう……そうだよね…まだ、諦めちゃダメだよね！
「う…おおおおおお!!!」
私は最後の気力で立ち上がった。
「ソウル！」
「おう！」
私はソウルを持って、鎌を構えた。
「私達は絶対に諦めない！諦めて…たまるかぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!」
「……ニヤリ…お見事です」
――ズガガガガ――――フッ…
「――え？…」
フィアの一言で、竜巻が私達の前で消えた。
「……え？…えぇ？ど、どうなったの？」
すると、フィアがこっちに一瞬で近づいて、私達の目の前にきた。

「あはは。すみませんね、今回の任務は死神様があなた達と私を戦いさせるために作った任務なのですよ。……あ、ちなみにですが――」
パチン！
フィアが指を鳴らすと、回りにあった街が全てなくなり回りは森に囲まれていた。
同時に、私達の傷や服や負ったダメージが最初から無かったかのようになくなっていた。
「今回、あなた方が来た町は私が独自で作った結界の中にあった町です。結界の中で負ったダメージは、結界から出ると、結界に入る前の常態に戻りますよ～。便利でしょ？」
私達はあまりにも唐突の出来事が多すぎて皆ポカーンとしていた。
「それでですね……――――あれ？……おぉ～い！聞こえていますかぁ～？」
フィアが手を目の前で振っていたので私達の意識が覚醒した。
「……あ、ごめん。えぇ～と…なにを話していたんだったっけ？」
「――ふぅ…。まぁ、いいです。取り合えず、これは死神様に頼まれたのと僕が個人的に気になったので受けた任務ですよ。ちなみにですが、私は魂の形をいろんなものに変化させる事ができるので、あのときあなた方が見た魂は自分で変化させたものなので、いつもはいたって普通の魂なのですよ～。まぁ、見たほうが早いですが」
私はフィアの言う通りに魂を見た。すると、魂は皆のように普通の魂の形だった。
「――あ、ほんとだ」
「ふふ～ん、スゴいでしょ～。褒めてもいいのだぞ！」
フィアは自慢そうに胸を張った。
私たち女子組は、その仕草に何故か、スゴく保護欲をかり立てられたのだった。
「うん、偉い偉い」
私は気づけばいつの間にかフィアの頭を撫でていた。
凄く髪の毛がフワフワのサラサラで気持ちよかった。
「～～♪」

撫でられていたフィアはなんだかとても嬉しそうだった。
「――はっ!?……こんな事をしていた場合じゃなかったんだ。早く死神様の所に帰りましょ?皆さん、送って行きますね～」
私達はフィアに言われた通りに魔方陣の中に入った。
「いきますよ～。――えい！」
パァァァ――
一瞬光ると、私達は死武専に来ていた。
「スゴい！」
私達は少しはしゃいでいたのだった。
「それでは、私はこれで。また後でお会いしましょうね～」
そう言ったフィアちゃんは、何処かに行ってしまった。
私達は取り合えず、死神様に報告するために、デスルームへと行くのだった。
――ん?あとで?……どう言うことなのかな?

４話　死武専に入ります♪

―マカ　ｓｉｄｅ―

あれから、私達は死神様に報告と事情説明を聞きにデスルームに来ていた。

「――死神様！どう言うことか説明してください!!」

「い、いやぁ～、いつか話そうとは思っていたんだけど～、ちょ～っと面倒くさくなっていたのねぇ～。

そ、それにほら、君達にも勝てない相手がいるってわかっただけでもいいじゃない！ほ、ほら、少しは強くなっていると思うよ～？」

死神様は少し慌てながらもそう言った。

「た、確かに少しは強くなれましたけど…――って、それとこれとは別なんです！一言くらい私達に話してもよかったんじゃないですか！」

「そうですよ、父上！少しでも話していれば、あのような戦いをしなくてすんだものを！」

私とキッド君が詰め寄るのでたじたじの死神様。すこし、悪い気がするけれど、あんな綺麗で純粋な魂を持った子を傷つけたなんて凄く罪悪感がスゴいんだもん…

「――まぁ～まぁ～、それに関しては私にも責任があるので死神様をそんなに攻めないでくださいよ」

スタン…

すると、突然背後から足音と声が聞こえた。

私達が振り向くと、そこにいたのはフィアちゃんだった。

綺麗な水色の髪に、赤に近い紫色の瞳を持った少女がいた。

「やぁ～っと来たのね～、フィアちゃん。――それにしてもまた、随分と〝女の子〟な格好をしているじゃなぁ～い？」

すると、死神様が突然そんなことを言った。……ん？〝女の子〟な格好？フィアちゃんって女の子だから普通じゃないのかな？

確かにいまのフィアちゃんの格好は、黒の袖がすこし余るセーラー服に赤いミニスカート、そして太股までかくれるピチピチのニーソックスだ。

すると、死神様の言葉を聞いたフィアちゃんはプルプルと肩を震わせていて……

「そんなことを言わないでくださいよ、死神様！そもそも死神様が両親に話を通していなかったから、罰として死武専生活で暮らす学生服はこの〝女の子〟な格好をしなくちゃならなくなってしまったんですからね⁉」

死神様にたいしてそう叫んだ。

――ん？〝女の子な格好〟？……え、フィアちゃんって〝女の子〟だから普通じゃないのかな？

「そうだったのか、ゴメンねぇ～。君の入学準備にかなり手間取ってて、あのとき、君にこの子達の実力上げの為の〝お願い〟をしたのは、君の入学準備を完璧に終わらすためだったんだ～。そんでね～、すぅ～っかり君のご両親に伝えるのをわぁ～すれちゃっててね～」

「え⁉嘘でしょ!!……だから、ここに久しぶりに来たとき、入学の話を一つもしなかったのかぁ～……」

「え？女の子な格好って、フィアちゃんは女の子なんだから、普通じゃないの？……あ、もしかして女の子な格好が嫌いなだけかな？」

私がそう言うと、フィアちゃんは不思議そうな顔でキョトンとしていた。

「……え？――あ、いや。私はこれでも歴史とした〝男〟ですので、女の子な格好をしていたらおかしいんですよ！……まぁ、確かによく間違えられますが……てか、似合いもしないのになんでこんな服を着なくちゃならないのさぁ～……うぅ～／／／／私はこれでも男何だよぉ～／／／／なんで…こんな…格好を～……うぅ～恥ずかしい／／／／」

フィアちゃんは恥ずかしそうにスカートを押さえて顔を赤くしながらも、とんでもない発言をした。

それを聞いた私達は固まった…

『え…えええええええええええ!!?』

「わひゃう⁉……い、いきなりなんですか、そんなに大声をだして…」

フィアちゃんが私達の叫び声に驚いていたが、私達はそれよりも

もっと驚いていた。
だって、見た目が美少女な女の子が〝少女〟ではなく〝少年〟だったのだから。
「……そ、そんなの…ありえない…」
「……こ、これは…ＣＯＯＬじゃないぜ…」
「さ、さすがの俺様も、これは驚いたぞ…」
「そ、そうね…、これは驚いたわ……――――それにしてもまさか、本当にいたんだね…〝男の娘〟って（ボソ）」
「ふむ…、この世にはまだまだ不思議で一杯なのだな…」
「そ、そうだな…キッド…」
「あはは～♪不思議だなぁ～♪」
みんながみんな、それぞれ思うことは違うがそれでも驚きの気持ちは同じみたいだ…
「……ねぇ…そんなに驚くことですか？……なぜ皆さんはいつもいつも、私が男だと言うと驚くのですよ……失礼だと思うのですよ…」
フィアちゃんの言葉に私達は納得してしまった。だって、こんなに可愛いのに男だなんて言われたら絶対驚くもん。
「――あ、そういえば、死神様に報告しに来たんだった…
死神様～、家の母様から伝言で～、『あのとき、手紙を渡し忘れてたからこの手紙を渡してね～』と言われたので渡しますね～。はい、どうぞ」
そう言いながら、フィアちゃんは死神様に一通の手紙を渡した。
「あ～りがとさぁ～ん！えぇ～と…
『死神様？…あなたの学校に私達のむすｍ――コホン…息子、楓ちゃんを預けます。……ですが！もしも、私達の楓ちゃんが傷つけられるような事があれば～――――どうなっているかわかりますよね？
あと、よくも私達に内緒で楓ちゃんにお願いごとをしましたね…今回、服がボロボロで帰ってきたとき悲鳴を上げてしまってしまいましたよ。――今回は、体には〝傷がなかった〟ので、目を瞑りますが…次からはこの様なことがないようにお願いしますよ？
……では、よろしく頼みましたよ、死神様♪

姫神　　桜より』

――だってさぁ～。うん。確りと面倒を見ようではないか！」

どうやら、死神様はその手紙を小さな声で読んでいてなにかわかったようだ。――なぜか慌てていたけれども、手紙にはなんて書いてあったのかな？

「そ～れじゃ、あらためて挨拶をしよっか。フィアちゃん。よぉ～ろしく！」

死神様がそう言ってフィアちゃんを指名した。

「は～い。では……

改めまして。私の名前は姫神　楓。仕事名はフィア・イン・キューブです。学校で使う名前はフィア・キューブリックです。

好きなものは、読書・修行・料理・栽培・そしてお煎餅です！

嫌いなものは、虫全般にニュルニュルとしたものです。

…そして、お化けです……（ボソ

明日からやっと学校に行けるので、お世話になるのでよろしくお願いしますね♪」

フィアちゃんはとてもいい笑顔で笑った。その顔にとても癒される私達だった。

「うん！よろしくね、フィアちゃん！……あ、フィアちゃんってよんじゃっていいかな？」

「あ、はい、いいですよ？読み方は好きなように」

「わかった。じゃ～フィアちゃんね！

あ、私の名前はマカ・アルバーン。あのときに言ったけれどもソウルが私のパートナーで鎌職人だよ！

ちなみに、父親はそこでのたれているエロ親父だから…。うちのお父さんには絶対に近づいちゃダメだからね！」

私は最後に絶対に近づかせさせないために念を押した。

「次は俺だな。俺の名前はソウル＝イーター。好きな事は音楽かな？まぁ、これからよろしく頼む」

「次は俺様だぁぁ！俺様の名前はブラック☆スター！いずれ神をも越えるビックな男だ！相棒は隣にいる椿だ！

覚えておけよ！そんで、これからよろしくな！フィア！」
「私の名前は椿です。パートナーはブラック☆スター。よろしくね、フィアちゃん」
「俺だな。俺の名前は、デス・ザ・キッドだ。パートナーはそこにいるトンプソン姉妹で2丁拳銃だ。これからはよろしく頼む」
「私は姉のリズ。んでもって此方が妹のパティだ。よろしくな、フィア」
「よろしくね～♪」
それぞれみんなの自己紹介が終わった。
「はい！マカさん、ソウルさん、ブラック☆スターさん、椿さん、キッドさん、リズさん、パティさん。皆さんよろしくお願いしますね♪」
フィアちゃんが綺麗なお辞儀をして挨拶をしてきた。
「別に〝さん〟付けはいらないよ！普通にマカって読んでね、フィアちゃん！」
「俺も呼び捨てでいいぞ。これから一緒に死武専の仲間に入るんだからな」
「俺様はなんでもいいぞ！」
「私も、フィアちゃんには呼び捨てで読んでもらいたいな」
「確かにな、その方が仲間意識も高まるからな。俺も呼び捨てでかまわない」
「私もいいぞ。」
「私も私も～」
「うん、わかったよ。じゃ～、マカ、ソウル、ブラック☆スター、椿、キッド、リズ、パティ、これからよろしくね♪」
『うん、よろしくね（な）、フィア（ちゃん）！』
こうして、私達の新たな仲間が加わったのだった。
「これから、よろしくね～、フィアちゃん」
「これから、君の先生だ。よろしくな、フィア」
「はい！死神様、シュタイン先生。よろしくお願いします！」
シュタイン博士と死神様もフィアちゃんを歓迎していた。
「そういえば死神様。フィアちゃんは武器なのですよね？なら、これ

からフィアちゃんのパートナーである職人を見つけなくちゃならないのでは？」
　私が聞くと、　死神様が此方を向いた。
「それはね～、フィアちゃんはいらないんだよ～」
　……え？それだけ？
「死神様、はしょり過ぎです。」
　シュタイン博士が嘆息しながら死神様に注意した。
「じゃ～、シュタイン君が説明してくれる～？」
「……はぁ～。わかりましたよ。
　さて、君達にはこの子……フィアちゃんについて話しておきたい。」
　シュタイン博士が話し出した。
「フィアちゃんは、確かに武器ではあるのだが、職人のいらない武器なんだ」
「はい。シュタイン博士。」
　私は手を上げた。
「なんだい、マカさん」
「フィアちゃんは何故、職人がいらないのですか？」
「それはね、君達と戦わした理由でもあるのだけれど、実はフィアちゃんは五歳の時から職人として活動していてね。この子は武器としてだけではなく職人としての腕もあり、自身の力だけで、武器職人兼　武器として活動していたんだ。」
　す…凄い…そうだったんだ…。
「そして、この子のご両親は世界中に散らばる武器職人と武器の中でも〝最強〟で〝最高〟の職人と言われるほど、腕が凄いんだ。
　この子の本命が姫神　楓。椿さんなら一度でも聞いた事があると思うけれども、この子は日本の代表ともいえる武器と職人の家――姫神家の人間なんだ。だから、ここの家の出身はみな、戦闘力が高くて、その中でもフィアちゃんは母に続いて〝職人と武器〟の両方をこなすほどの天才なんだよ。」
　へぇ～、そうだったんだ…。
「それでは、デスサイズにはならないのですか？」

今度は椿ちゃんが質問をした。
「その事も話さなくてはね…。フィアちゃんは五歳の時から職人として活動していたって言ったよね？
フィアちゃんは、実は既にそこにいるスピリット先輩同様〝デスサイズ〟並みの力を持っているんだ。
だから、フィアちゃんは強かったんだよ。デスサイズではないけれど、デスサイズと同じ力を持っているわけなんだ」
「ええ!?そうなの！フィアちゃん！」
みんなが今日2回目の驚きの中、私はフィアちゃんに質問した。
「うぅ～ん……そうらしいです」
フィアちゃんは苦笑しながら答えた。どうやら、あまり実感はなかったようだ。
「まぁ、そんなわけだから。フィアちゃんは魂を集めてデスサイズにはならないんだ。
そんな事よりも、フィアちゃんと仲良くしてなげなよ。みんな」
『はい！シュタイン先生！』
私達は同時に返事をする。
「んじゃ、今日はもう遅いし解散しよ～」
死神様の言う通り、今日はもう夜になっているので、私達は明日の為にも解散したのだった。

5話　死武専での自己紹介？

さてさて、やってまいりました死武専。現在私は教室の扉の前で待機中です。

え？なぜそんなところにいるのかって？・・・・・・むっふっふぅ～♪そんなの簡単なことじゃないですかぁ～♪自己紹介ですよ！自己紹介!!ひとりで絶賛待機中なのです！

「入ってこい」

おっと、呼ばれたみたいですね。なら行きましょう！我が拠点（クラス）へ！

ガラガラガラ――

―ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

―マカ　ｓｉｄｅ―

あれから私達は教室に戻って、カエデ――いや、フィアちゃんを待っていた。どうやら、クラスは私達と一緒らしい。

「てなわけで、今日から新しく仲間が増えま～す。よろしくしてあげてね～？」

いつものように、適当にしながらそんな事をサラリと言ってしまうシュタイン博士――もといシュタイン先生。

「先生!?いったいどう言う事ですか！しっかり説明してください!!」

クラスのひとりが叫びながら意義を唱えた。

「・・・・・・んー・・・・まぁ、いろいろあるんですよ。大人の事情ってやつです。とりあえず呼ぶので質問は後にしてください。流石にずっと外に待たせるわけにはいかないので」

シュタイン先生がそういうと、渋々ながらも黙ったクラスメイトの男の子。

「それでは、――――入ってこい」

ガラガラガラガラ・・・

「失礼します」

扉が勢いよく開く。そこに立っていたのは、綺麗な水色の髪で赤紫

色の目の少女のフィアちゃんだった。
ちなみに、フィアちゃんは仕事名で、本名は夜知楓と言うらしい。フィア・キューブリック又はフィア・イン・キューブが仕事名なんだって。だから、私は呼ぶ時フィアちゃんと読んでいる。
すると、フィアちゃんは黒板の前にきて、ちょうど真ん中にいたシュタイン先生の隣に立った。
「今日から新しく仲間になるフィア・キューブリックちゃんだ。仲良くするように」
「フィア・キューブリックです。皆さん今日からよろしくお願いいたします♪」
とてもいい笑顔で挨拶をしたフィアちゃん。それをみたクラスメイト一同は顔を紅くして固まってしまうのだった。・・・・・男の子とわかっていても、その笑顔は反則だよ・・・フィアちゃん
―ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―
―？　ｓｉｄｅ―
よう、初めましてだな。俺の名前は近衛一誠。俗に言う転生者だ。
俺は前世でとある理由で死んでしまった。・・・なに、理由は至って簡単なこと。俺は家族・・そう、兄さんがいたんだが、大好きだった兄さんが突然この世を去った。
兄さんが散歩をしている時に、俺達の一族に恨みを持った奴に殺されたんだ。
両親は5年も前に事故で死んでしまっていて、優位つ無二の家族だったんだ。そんな最後の家族を俺は失った。
兄さんの葬式の後、俺は犯人を探した。かなり手間取ったが犯人は見つかった。・・・・・でも、ここでさらに衝撃なことがわかったのだ。――それは、事故死と思われていた両親を殺したのも、兄さんを殺した奴らだったんだ。俺は恨んだ・・・憎しんだ・・・怒り狂った・・・・・オレの怒りや憎しみは頂点に上り、そのまま貫通した。
そして、俺はその仲間や同じ血族の奴らを皆殺しにした。最後に残った実行犯である犯人と相打ちにあって、俺はそのまま息を引き取ったのだ。

それからというもの、いわゆるテンプレってやつで、特典をもらいダーツで転生する世界を決めると、この『ソウルイーター』の世界だったんだ。

この世界はオタクでもあるオレの大好きな世界の一つだった。正直嬉しかったさ。・・・まぁ、最後に心残りがあるって言えば、両親と兄さんのお墓参りに行けないことかな・・・。まぁ、俺が行けなくても、同じ気持ちだった優しい従兄弟姉妹達や一族の仲間達が墓を守ってくれるだろう。なんせ、一族の敷地にあるもっとも霊験豊かな所に墓を建てているから、一族が強襲されない限り無事だろうな。

さて、そんなこんなでいろいろあって無事に転生したオレなのだが・・・・・・いかんせん、赤ちゃんの羞恥プレイはなかったものの、転生したときから既に独り身だった俺は、神の渡した家と共に、転生特典を修行して、頑張ってこの死武専に入れた。いまや立派なソウルイーターを目指して頑張っている武器職人でございます。

・・・・・・でだ。俺はハーレムを作ろうと頑張って十何年――あれからかなり年がたったが、つい最近原作が開始したところなのだが・・・・・・シュタイン博士が先生をしてデス・ザ・キッドが同じクラスメイトになった所まではまぁ、原作ぞいでいいのだが、・・・・・この時期に新たにクラスメイトが加わるらしい。おかしい。いくらなんでもおかしい。デス・ザ・キッドがクラスメイトになってからは誰も新しい仲間は増えないはずだ。原作ではそうだった。

だから、俺は焦った。

「先生!?いったいどう言う事ですか!しっかり説明してください!!」

俺は大声を上げてシュタイン先生に意義を問うが……

「・・・・・・んー・・・・まぁ、いろいろあるんですよ。大人の事情ってやつです。とりあえず呼ぶので質問は後にしてください。流石にずっと外に待たせるわけにはいかないので」

はぐらかされた……流石にそんな言い方されたら、しぶしぶ諦めるしかないじゃないか。

――いや、まてよ・・・・・・確か、神が俺が転生する時に『その世界にはワシの親友が転生させた転生者が〝3人〟ほどおるので

な。まぁ、出会ったら挨拶ぐらいしておけよ。――それが善人であるならばな……』

……なんて言ってたっけ?――――ってちょっと待てい!それなら、絶対このタイミングで来るやつなんて転生者以外ありえねぇ!

……もしも、そいつがオレのハーレム計画の邪魔者であるその時は――――

まぁ、いいさ。とりあえずどんなやつか見てみようじゃないか…

「それでは、――入ってこい」

ガラガラガラガラ・・・

「失礼します」

扉が勢いよく開いた。そこに立っていたのは――綺麗な水色の髪で赤紫色の目の少女だった。

その姿を見て俺は固まった。何故なら――オレの大好きな作品のキャラクターのひとりだったからだ。

すると、やつは黒板の前にきて、ちょうど真ん中にいたシュタイン先生の隣に立った。

「今日から新しく仲間になるフィア・キューブリックちゃんだ。仲良くするように」

「フィア・キューブリックです。皆さん今日からよろしくお願いいたします♪」

とてもいい笑顔で挨拶をしたフィア・キューブリック。それをみたクラスメイト一同は顔を紅くして固まってしまうのだった。

だが、俺は別の意味で固まっていた。……それもそうだ。なんたってオレの知っていて更に大好きな作品に出てくるキャラクターのひとりが目の前にいるんだ。誰だって驚き固まるだろう。

ちなみにいまのクラスの状態とオレの状態を比べると……

「(? ?・?A?・? ?)」ドキドキ　　↑クラスメイト

「(。Д。)」ポカーン　　↑オレ

……で、ある。

フィア・キューブリック……本名を箱型の恐禍(フィア・イン・キューブ)

こいつは、C・―シーキューブ―の主人公・夜知春亮の家に送りつけられた禍具（ワース）という呪われた道具の一つで、呪いを受け続け人化したもの。それがフィア・キューブリックだ。

普段は小柄な少女の姿をしているが、実体は金属製の黒い箱の形をした拷問処刑器具『箱型の恐禍（フィア・イン・キューブ）』である。

箱の中では無数の鉄片が複雑に絡み合っており、三十二の拷問器具へ変形出来る。まさに拷問処刑器具の集合体なのである。

フィア・キューブリックは主人公のお父さんに家に送られたあと、主人公と共にいろんな困難を乗り越えて成長していくのだが、フィア・キューブリックはヨーロッパの古城の地下に長い間隠されていたため、一般常識に著しく疎いのだ。そのため主人公の家に来た時には、掃除をしようとして部屋の中をめちゃくちゃ（粉々）にしてしまったぐらいだ。それからというもの、一般常識を知らなすぎて、主人公とその仲間達を散々振りまわす事となる。

ちなみに好きな物は「煎餅」、嫌いな物は「クモ」、そして最後に口癖は「呪うぞ！」「ハレンチだ！」の二つである。

そんなことも含めて、俺はこの妹キャラともいうべき存在はとても好きだったのだ。

そんな大好きなキャラが目の前にいる。確実に転生者だと1発でわかってしまうのだ。

……さて、オレの大好きなキャラであるフィア・イン・キューブの姿をした転生者。てめぇはオレの敵か否か――見定めてもらおうじゃないか・・・。

それから、フィア・キューブリックの自己紹介も終わり、その日の授業もこれで最後なので、みんなそれぞれ帰っていった。

そして、俺はすぐさま行動に移した

「おい、フィア・キューブリック。ちょっと来いや。話があるからよ」

俺が呼ぶと、フィア・キューブリックは小首をかしげながらトコトコと歩いてきた。その時、ちょっと可愛いって思った俺は悪くないと思う。

「なに？話って？」
フィア・キューブリックが聞いてくるが、俺は後ろを向いてついてこいと指示をだした。
俺が歩き出すとフィア・キューブリックもついてくる。
――しばらく歩いていると、全く人気のない部屋が見えてきた。
ここは、開かずの扉と呼ばれている、どんな事をしても、本当に開かない部屋なのだ。なんでそんな部屋に来ているのかと言うと、実はこの部屋はオレの今住んでいる家に繋がっているのだ。これも神がくれたもので、オレの許可がない限り絶対に開かない仕組みになっている。
そして、俺は扉を押すと、簡単に開いた。開いた先に繋がっていたのはオレの自室である。
自室には何も無い。いや、実際にはあるのだが、魔法で見えなくしているだけなのだ。
さて、そんな事よりも、さっさと用を済ませよう。もし仮に敵だったとしてもこの場で殺せばいい。ここはいわばオレの結界の中。この部屋の中ではオレの意思で自由にできる。あんな事やこんな事もできちゃうのだ。
「単刀直入に聞くけどさ、お前・・・転生者だろ」
俺が聞くと、すこし目を見開くも、すぐにふつうの顔に戻りニッコリと微笑んだ。
「ええ、そうだよ。そういうあなたも転生者？」
フィア・キューブリックが俺に聞いてきた。
「ああ、そうだ。いまから結構前に転生してきた。」
「私もだよ。もう、かれこれ数十年ほどたつのかなぁ～。数えてないからわかんないやぁ～・・・・えへへ♪」
「・・・・・・コホン。と、ところでだ。おまえはどうやって転生してきたんだ？ちなみに俺は死んで神にダーツで決めたらここになった」
そう、まじでただの運なんだよなぁ。ほんと知っているアニメでよかったぜ。
「私もダーツだったよ？そんでたまたまこの世界だったんだぁ～」

「そうだったのか。・・・・・・そういえば、転生させた神が言ってたんだが、オレ以外に転生者が3人いるらしい。ひとりはお前だとして、もう2人を知らないか？」
　すると、フィアはう～んと悩んだ後口を開いた。
「・・・・多分だけども、その2人はうちの両親だと思うよ？なんたって、両親も転生者みたいだからね。ちなみに、姿が父は夜知春亮で、母が村正このはなんだよ。」
・・・・・・・なん・・・・だと!?
「・・・・・・・え？マジで？」
「うん！マジで♪」
　笑顔で答えたフィア。・・・ちょっとまてよ・・・・え？なにそれ。なんでそんな両親もってんの!?てか、家族揃って転生者かよ！ありえねぇ!?
　それに、家族があのC3―シーキューブ―かよ!?どうなってんだその家族!?
「そ、そうっすか・・・・・・ま、まぁいい。これが最後の質問だ。おまえはオレの敵か？」
　と、とりあえずかなり驚いてしまったが、これが何よりもの重大な質問だ。いままでの質問はあくまでもついでだ。これが何よりも・・・そして、一番聞かなきゃいけない質問だ。なんせ、オレのこれからの人生がこれで決まるのだからな。
「・・・・・・・うーん・・・よくわかんないけれども、とりあえず言えることは私はあなたの敵じゃないよ？そんな気がするんだ♪」
・・・・・・・・・・？なんかよくわからない答えが帰ってきたな？
「・・・・どう言うことだ？」
「う～ん・・・・どう説明すればいいのかなぁ？なんとなくなんだけどさ・・・、あなたはね？私の――前世の家族であった〝弟〟に似ているの。雰囲気がなんだけどね？
　まぁ、そんな感じでさ、自分でもよくわからないんだけれどそんな気がするの。前世の事なんて殆ど覚えていないんだけどね。でも、前世で強く記憶に残っているものはたくさん覚えているよ？その記

憶の中に弟がいたんだぁ」
・・・・・・へぇ。弟さんがいたんだな。その様子を見る限り、よほどその弟さんの事を好きだったらしいな。
俺も兄さんがいたからなぁ。・・・兄さんはオレの事をどう思っていたのだろうか？聞く前に先に逝っちまったからなぁ。――兄さん。
「弟さんがいたんだ」
「うん。そうだよ。うちの弟はね？とっても素直で賢くて、兄の私よりもすごく頼りになって強いの。
私達家族は、両親と弟と私の４人で暮らしていたんだけどね、ある時両親は事故で死んじゃったんだ。
その日以来、私はまだ小さかった弟を養うためすっごく頑張ったの。まぁ、家自体とっても大金持ちで昔からあるとある〝一族〟の子孫だったんだけども、その一族はね？人外なる者を倒す一族だったんだぁ。だから、私は弟のぶんも頑張って人外なる者を狩って働いていたんだけども、弟が大きくなるとね、私なんかよりもずぅーっと大きく、そして強くなってね。いつの間にか守る側から守られる側になっちゃったんだ。――まぁ、私はむしろ、弟が強くたくましく優しい人になって嬉しかったんだけどね・・・・・・でも、やっぱり兄として守りたかったなぁ。
でも、そんなある時、私は散歩をしてたら、いきなり死んじゃったみたいでね。気がついたら神様のいる所だったの。
それからというもの、私は転生していまの生活を楽しんでいるんだけれども・・・・・・・・・やっぱり、心残りはあるかな・・・なにも言わず弟を一人ぼっちにさせちゃって・・・。」
・・・・・・え？なんか知ってる人っぽいんだけど・・・もしかして、この人って・・・・・・いや、いやいやいや。ないないない！この人が〝あの人〟なわけないじゃないか！あの人はこんなにかｗ―ゲフンゲフン！・・・こんな人なわけがないじゃないか！ましてや、あの人が転生してるなんて、ありえねぇしな。
「弟はね？ああ見えてとっても寂しがり屋で泣き虫なんだ。兄の私がいないとすぐ泣いちゃうし、成長しても泣きはしなくなったけども、

すぐ私を探そうとするの。・・・・・・でも、そんな所も含めて可愛いんだ。私の弟は・・・・・・ふふふ♪・・・・・・・・・・・・でも、そんな弟も一人ぼっちにしちゃったなぁ・・・・あの子にとっての家族って・・もう・・・・私しかいないのになぁ・・・・・・・心配だなぁ」

そう言って、どこか不安そうな顔をしているフィア。

・・・・・・俺はある事が気になって聞いてみることにした。たとえそれが――後悔することになるとしても

「ひとつ・・・・・・・聞いてもいいか？」

「・・・・・・ん？なにかな？私の答えれることであれば、なんでも聴いていいよ？」

フィアから許可をもらったので、俺はひとつ深呼吸をして、勇気を出して聞いてみた。

「・・・その、弟さんの名前は・・・・・何て言うの？」

すると、オレの質問にフィアは目を見開いたあと、顔をしたに向けた。

しばらくの沈黙が部屋の中に漂った。

「（・・・・・・・・・・やっぱり、聞いちゃいけない質問だったかな？はぁ・・・やっちまったなぁ）」

そんな事を思いながら、俺が深いため息を心の中でしながら、後悔していると・・・

「・・・・・・・せい・・・・」

「・・・ん？・・・・・ご、ごめん。聞こえなかった。もう一度だけ言ってくれるかな？本当にごめん」

すると、フィアが顔を上げてオレの目を見てきた。――そして、その瞳には薄らと涙が流れていた。

「・・・・どう、いっせい・・・・・・・私の・・・私の弟の名前は――〝兵藤一誠〟。それが、私の弟の名前。」

・・・・・・・・・・・・え？・・・・・うそ・・・だろ・・・・・・・そ、それじゃぁ・・・この人の名前は――

「――兵藤・・・桜・・・・・・」

「え・・・？」
俺とフィアの目と目が合う。
・・・・・・あ、ははは。ま、まさか・・・こんな所で〝あの人〟とあの〟最愛の家族〟と・・・会えるなんて――
「・・・え・・・・・・あ・・・へ？・・・・・な、なんで・・・私の名前を・・・？」
フィアはかなり狼狽していた。それはそうだ。知らない人なのにいきなり自分の――それも前世の名前を言われたら誰だって驚くさ。・・・でもね
「なんて顔をしてんだよ…姉さん――いや、兄さん」
オレの言葉に今日一番目を見開いた兄さん。・・・・・・ははは。どんだけ目を開くんだよ・・・まったく。
「・・・へ？・・・・・も、もしかして・・・・・イッセー・・・・なの？」
兄さんが不安そうに、そして、嬉しそうに聞いてきた
「あぁ、そうだぜ？あんたの弟の兵藤一誠だ。――なんだよ、自分の〟最愛の弟〟の顔を忘れたのか？」
俺がニヤリと笑みを浮かべながらそう言うと、兄さんが顔をふせた。それと同時に肩を小刻みに震わせている。
俺はなにかまずいことでもいったかな？なんて思っていると、兄さんがガバッと抱きついてきた。
身長的に兄さんはオレの胸に飛び込む形になるので、俺はタックルをかまされたのと同じになる。なのでのけぞるわけだが、倒れないように足にめいいっぱい力を入れて、なんとか踏ん張った。
俺は兄さんに文句を言おうと兄さんの身体を掴もうとしたが・・・・・・
「ほんとうだぁ・・・・イッセーだ・・・弟の・・・イッセーだぁ・・・・グスン・・・・よかったよぉ・・・・・・また・・・また会えたよぉ・・・・・・ふえええええん！」
オレの胸の中で両腕をオレの腰に巻き付けながら泣きわめく兄さん。そんな兄さんを見た俺は、兄さんの頭を優しく撫でた。
「久しぶり・・・兄さん。――そして、おかえり」

「・・・うん。うん！――――ただいま。イッセー！」
兄さんの眩しい笑顔を見た。そしてすぐにまたオレの胸の中に顔を埋めて泣き出した。とっても嬉しそうに。
――そして、そんな俺も、静かに涙を流していた。
「（おかえり――お兄ちゃん）」
俺は今日・・・・・・いや。人生で一番幸せかもしれない。なんせ、死んだと思っていた・・・二度と会えないと思っていた。最愛の家族で自慢の兄と、今日、この場で、この世界で、この場所で会えたのだから！
俺は神に感謝しよう。もう一度、俺に新たな生を与えてくれたこと、新たな人生を歩ませてくれたこと、そしてなにより、二度と会えないと思っていた最愛の家族とこうして合わせてくれた事を！
神様…本当に、本当に！――ありがとうございましたぁぁぁ!!!!!
「もう・・・何も言わず何処にも行くなよな・・・兄さん」
「――うん。もう何処にも行かない。約束する。だから――イッセーも勝手にいなくならないでよね？約束だよ？」
「――あぁ、約束だ。オレ達、兄弟のな」
「うん！約束♪」
俺と兄さんは小指を絡めて約束をした。もう二度と――俺は家族を・・・兄さんを失わない。
だから俺は――――
「（強くなってみせる!!）」
そう、新たに心に誓い、２人で約束をするのだった。
―ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―
―Ｎｏ　ｓｉｄｅ―
ここは神界・・・数多の神々が住んでいるどこの世界にも繋がっている、一つの世界だ。
そんな世界の中にある一つの空岩。
その空に浮かぶ岩には岩は平に綺麗に丸く整備されており、まるで床は大理石の様だった。
そんな所に、同じく大理石で出来た小さな円卓があり、そこに２人

の人影が見える。
そう、このふたりは、先ほど運命の出会いを果たせたふたりの転生者を、それぞれ〝転生させた〟神である。
「ふぉっふぉっふぉ。よかったのぉ～。じつによかったのぉ。これでやっとひと安心じゃわい。」
1人の、長い白ひげを垂らした老人がその長い髭をさすりながら嬉しそうにいった。
「なぁにがひと安心じゃわい……じゃ。ワシはどうなるかヒヤヒヤしたぞ。」
すると、もう片方の、今度は老人と違い、確かに老いているのだがいっけんヒョロそうに見えて、実は物凄く筋肉質のモリモリマッチョである、まさに、武闘家の老人である。
片方の老人とは違い、頭は禿げているのに、その眉毛と髭はやたら長い。白く長い髭と眉毛を持った、目の細い老人だ。
「ほっほっ。まぁ、結果は良かったんじゃからいいではないか。のう、イザちゃん」
「なにがイザちゃんじゃ。オーディン。ワシはイザナギって名前がある。その名前で呼ばんかい。まったく」
「ほっほっほっ。まぁ、よいではないか。ワシとお主の仲なんじゃ。それに今はプライベートなんじゃからな」
「ふん。まぁ、よいわい。尺だが、確かにオーディンの言う通り良い結果……それも、想像以上に良い結果になったからの。なにも言うことはないわい。はぁ、疲れたぞ。いきなり転生させると言われた時は心底驚いたわ。」
「すまんのぉ。まぁ、なんだ。ありがとうのぅ。わしの勝手なわがままに付き合わせてしもうて」
「ふん。……いい酒を用意すれば許してやらんでもないぞ?」
「……はぁ、まったくお主は相変わらずの酒好きじゃな。だが、そういうだろうと思って持ってきたぞい!この有名な〝神殺し〟をのう!」
「おお!!そりゃ～いいもんをもってきたの!さすがオーちゃんじゃな

！」
「ほっほっほっ！さぁ、潰れるまで存分に飲み明かそうぞ、イザちゃんや！」
「おう！オーちゃん！」
そして、二神の神は酒をもって、酔いつぶれるまで飲み明かしたそうな。
そのあとこの２人がどうなったかは――いわなくても想像はつくだろう……
こうして、神々の心配事はひとつ減ったのだった。
―ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

―一誠　ｓｉｄｅ―
あれから何時間がたったのだろうか……俺と兄さんの感動的な出会いから、泣き止んだ俺達２人は、この転生してからの話をしていた。
感想を言わせてもらえば、とっても面白かった。それはもう―すごくな。
ただ……俺はいま、物凄く深刻な問題に直面している。……え？それはなんだって？――ふっ、それはな…
「えへへ～♡イッセぇ～♡」
あ・の・に・い・さ・ん・が!!!すぅっっっっっっっっっっっっごく！甘えて来るんだよ!!
た、確かにな。あの兄さんは前世の時も、それはもう美少年――いや、絶世の美少女だったさ。男なのに、姿もそうだったが、趣味も特技もなにより仕草も――すべて！女の子だったさ！……まぁ、流石に私物や部屋まで女の子してたか？って聞かれたら、もちろん答えはＮＯだが。それでも、女の子だったさ。おそらくだが、あの溺愛しまくっていた、俗に言う親バカの両親が洗ｎ―ゴホン。調教していたのだろう。↑イイカエセテネェヨ　Σ＼（。Д。；）
まぁ、それでだ。いまはどうだ？……もうね、最早女の子。それも超絶の美少女だ。
ましてや、その姿はオレの大好きだった作品のキャラクターだ。そ

れが意味するのはなにか……。お前達なら言わなくても、もうわかるだろう？

「(落ち着けオレ落ち着けオレ落ち着けオレ落ち着けオレ落ち着けオレ落ち着けオレ！――相手は兄さんなんだ！男なんだ！見た目は美少女だが、歴史とした男の娘なんだ！そんな、最愛の家族であり血の分けた兄弟である、兄上に対して欲情なんてそんなアホなことをするわけｇ――)」

「むふふ～♪……イッセーェ…あったかぁい」

兄さんが甘えるように、甘い声を出しながら、キュッと抱きついてきた。さらに顔を胸に擦り付けながら。

そんな仕草に俺はと言うと……

「ブシャアアアアアアアアア!!!!」

俺は盛大に鼻から愛を吹き出してしまった。

「わわ!?だ、大丈夫？イッセー」

心配そうに見てくる兄さん。よかった。どうやらオレの赤い愛(鼻血)は一滴もかかっていないようだ。

「だ、大丈夫だ。問題ない。

(フォォォォ!!やらけぇぇぇ!!兄さん肌超スベスベプニプニじゃねぇーかぁぁ！なにこれなにこれ!?テンション上がりまくってるんだけどぉぉ!!マジでヤバイ！本気でヤバイ！本気と書いてマジでヤバイぞォォ!!!

アヒャひャひャひャひャひャひャ!!!!!!

うぇーい！兄～さんかぁいいよぉぉお!!!fwuuuuuuuu!!!!

やっべぇー！ほんとう……いい匂いだなぁ!!

クンカクンカ！ハスハス！ハスハス！。

――ハァハァ。もう辛抱たまんねぇぇぇ!!

兄さん最高にエロいぜぇぇぇ!!!

ほんとう、最高にハイってやつだぁぁぁ!!!!!!!!

ヒャッフウウウウウウウウ!!!!!!)」

内心で暴れていた。

もうマジで辛抱たまんねぇ！こんなの無理！健全な健康男子には絶対無理！こんなの、お年頃の俺達男の子には刺激が強すぎる！

こんな可愛い美少女に膝の上に座られ、さらに胸にうずくまるように、顔をほんのり赤くさせながら『えへへ……あったかぁい』なんて言われて……正気でいるやつなんているか？いねぇよこんにゃろぉぉぉぉ!!

「い、イッセー？本当に大丈夫なの？」

心配そうに顔を覗いてくる兄さん。しかも上目遣いで……

「ああ。大丈夫だよ。兄さん。心配しないで。ちょっと興奮して鼻血を少しばかし出したていどだから。（グヘヘヘヘ。かぁいいなぁ～兄さんは。こんな無防備にいたらオレ……ジュルリ――おっと涎が。それにしても、なめらかな肌にスラリとしたクビレ。さらに、舐めゆかしい首筋にぷりんとした小振りのお尻。くふふふ。なんて、誘惑でそしてエロいんだ。

さすがは兄さんだな。昔から変わっていないぜ！――いや、むしろ、昔よりもエロさがランクアップしているね！グヘヘヘヘ……おっと、危ない危ない。鼻から愛をまた吹き出すところだったぜ）」

そんな、もう手遅れな状態の俺は、内心で暴れつつも、紳士の様な振る舞いで兄さんに答えた。

「そう？ならいいんだ。ちゃんと身体を健康にしないとダメだよ？健全なる魂は、健全なる肉体と精神に宿るんだからね？」

「ああ、わかってるよ。俺だって死武専の生徒であり、武器職人の端くれなんだ。オレはいつか、兄さんのいまいる場所へと上り詰めて、一緒のステージにたってやるんだからな！まってろよ、兄さん！」

すると、兄さんは微笑みながら俺を見た。

「うん。まってるよ。いつまでも……イッセーが上り詰めてくるその時までずぅーっとね。――でもイッセー。これだけは言わせてね？」

兄さんが人差し指を立てながら言ってきた。

「私は守られるだけじゃ嫌なの。だから、私は今よりももっともっと強くなる。だから、イッセーももっともっと強くなって、私の所にお

いで。まってはあげる。……でも、強くなるのだけは待ってあげない。もたもたしていると、すぐ置いてっちゃんうんだからね？死にものぐるいで上がってきなさい！私は楽しみにしているから♪」
「ははは、手厳しいこった。こりゃぁ、本腰入れて頑張らなくちゃね。俺も、守られるだけじゃ嫌だから。だから、オレももっともっと強くなって、兄さんの肩に並べるようにしなくちゃね！」
「うん。そのいきだよ！イッセー♪」
「んじゃ、まってるから。早く上がっておいで？」
「おう。まってろ。早く上がってやるからさ！」
こうして、俺と兄さんは互いの拳を合わせて、その日を過ごすのだった。
ちなみに、兄さんは結局このままオレの家に寝泊まりして、部屋は沢山あるけど、俺と一緒の部屋に寝るのだった。理由を聞けばなんでも『久しぶりに一緒に寝ようよ……ダメ？ウルウル』そんな上目遣い＋涙目で可愛くオネダリされたら断れないぜ。
そんなこんなでいろいろあって、いろんな意味で眠れなかった俺だった。

6話　黒き者と紅き者

あれから、はや数日。私は今日、死武専に来て初めての任務をしている。ちなみに、任務の内容は『鬼神の卵の魂狩り』系統の任務だよ。
「なぁ、姉さん。えらく今日は機嫌がいいんだな。珍しく」
すると、隣にいた近衛一誠。改めイッセーが私を見ながらそう言った。ついでに瞳が何故か微笑ましいものを見る親のような目をしているのはきっと気のせいだと思う。
「まぁーね～♪今日は死武専に来てから初めての任務だからね。だから、やる気満々なんだよ！」
私の言葉に、イッセーが不思議そうな顔をした。
「でもさぁ、確か姉さんはここにきて死神様にあいつらのの補習と言う名の修行を頼まれたんじゃなかったっけ？」
「あぁ、あれか？いやね、あれは頼まれごとだし、まだ正式には入って無かったから、カウントに入れてないの。」
「へぇー。そうだったんだな。」
「あと、イッセー。いつも言ってるけど私は姉さんじゃなく兄さんだからね？何度いえばわかるのかな・・・？」
「そんなことを言われましても、姉さんは前世でもそうだったけど、見た目美少女じゃん。しかも、今世はさらにその美少女に磨きがかかってるし。これで兄さんなんて、しっくり来ないぜ！」
笑顔で言うイッセーにイラッときた私はとりあえず殴った。それも全力で。
案の定、イッセーは『ぐべらぁ!?』と言いながら吹っ飛んだ。５ｍほどだけど。
「――～っ!?イッテェーーーーー!!!!」
イッセーは殴られた顔を抑えながら地べたでのたうち回っていた。チッ・・・その程度でしたか。相変わらず頑丈だけが取り柄だね。
「い、いきなりなりするんだよ！姉さん!?」
「・・・・・いや、なんか、さっきのイッセーの笑顔がイラッてしたから――つい」

「つい、じゃないからな!?酷すぎないかその理由！」
「ごめ～んね☆」テヘペロ☆
　私は、キラーン！と音がなったかのような感じで舌を出してウインクした。すると、それを見たイッセーが何故か鼻を抑えだした。・・・え、なんで？
「・・・・・・ねぇ、イッセー」
「な、何かな姉さん」
「なんで鼻を抑えてるの？・・・・・しかも――――」
　私はある一点に視線が集中した
「そんなに〝大きくして〟・・・・・」ジー
「へ？・・・・・・・・・・・・・おほァ!?」
　イッセーは慌てて大事な所を隠した。そう。イッセーは何故か鼻血を出すだけじゃなく、男の象徴でもあるあそこを立てていたのだった。
　イッセー・・・・・・・
「ドMの変態さんだったの？」
「違う!!」
　私の言葉に一瞬で否定してきた。・・・でも、ねぇ
「だって・・・・・殴った後に、いきなり鼻血出したと思えばそんな所を立てて――――言い訳できる？」
「無理ですすみませんでしたぁーー!!」
　イッセーは空中土下座という披露をしていた。
「・・・・・・ふぅ。まぁ、いいです。イッセーが昔から変態さんだったのは知っていますから」
「ねぇさぁ～ん」ガクッ
　イッセーはかなり精神的ダメージを受けたのか、項垂れていた。
「ほら、そんなくだらないことしてないでさっさと目的の人物を探しますよ。イッセー」
「お、おう！」
　とりあえず、イッセーいじりを楽しんだ私は地面で項垂れているイッセーを立たせて、今回の任務の目的の討伐対象人物である『殺人

魔アレン』という伝説の殺人鬼だ。
この人物は、なんと５０年も前の人物であり、本名はエレスーダン。警察署で無限罪の刑で牢屋に入ってたらしい。それも、ろくな食事も睡眠を与えず、毎日の様に拷問の苦痛の毎日を受けた中をずっと５０年も生き続けたのだ。それもそのはず、既に魂喰らいの化け物になっていたのだから、その程度で死ぬはずがない。そして、つい最近捕まっていた警察署の人物を皆殺ししその魂を喰らい強くなりすぎて、死武専に討伐依頼がきたのだ。――で、今回その討伐依頼を私が受けたんだけども・・・・・イッセーは何故か付いてきた。理由は『姉さんだけじゃいろんな意味で危ないからついていくぞ！（絶対、ナンパされるからな）』って言って付いてきた。なんか、別の考え事をしていたきがしたけども、気にしないで結局ついてくるなら勝手にして――と言って今にいたるのです。
「ほら、イッセーはやｋ――」
私は殺気を感じて、感じた方に視線を向ける。そこには一つの人影があった。
「くけけけけ・・・・・生きのいい魂が二つ。うまそおうだなぁ」
背中に巨大な包丁の様なものを背負った囚人服の男が立っていた。おそらくこいつが目的の討伐対象なのだろう。
「あなたがエレスーダン・・・・・・・いや、アレン？」
「くけけ・・・いかにも俺が殺人鬼アレンだ。さて、お前達は誰だ？」
「私の名前は『フィア・キューブロック』死武専の生徒だよ。そして、あなたの魂をいただく者です」
「同じく死武専生徒の『近衛一誠』だ。そして、隣にいるフィアの相棒だぜ！てめぇの魂いただくぞ!!」
私は優雅に、イッセーは堂々としながら自己紹介をした。
「けキャキャキャキャ!!そうかそうか！死武専の奴らか！この俺の魂を取りにきたのか？ええ？なら取ってみろよ。テメェらガキ程度に負けるほど弱かねぇよ！逆にテメェらの魂喰らってやる!!」
「キジャーー!!」
鋭い獣の様な歯をむき出しにして涎を垂らしながら、こっちに走っ

てきた。
「いくよイッセー！」
「おう！」
私はイッセーに合図を送るとイッセーは頷いた。
「こい！『赤龍帝の篭手』」
一瞬腕が光ったと思えば左手に赤い篭手が出てきた。これは、イッセーが前世の時から持っていたものだ。
「今日もよろしくなドライグ！」
『おうよ、相棒』
せると、篭手の手の甲の部分に付いていた大きな宝玉の様な所から声が聞こえてきた。
これは、イッセーが前世持っていた神滅具（ロンギヌス）と呼ばれた武器の一つだ。その中には赤龍帝ドライグという二天龍と呼ばれたとっても強いドラゴンがいるんだよ。で、イッセーとドライグはとっても仲良しで相棒と呼ばれるぐらいの信頼度と絆で結ばれているんだよ。普通なら死ねばどこかの別の所持者に移り変わるんだけども、神様は特別に許可をくれたみたいで、いまも一緒にいるみたいなんだ。
「いくぞ！はぁ！」
ドウッ！
イッセーはアレンに一瞬で詰め寄った。どうやら生前でよく使っていた縮地を使ったようだ。そのおかげか、アレンは面を食らったのかのような顔をして固まりスキが出た。もちろんイッセーがそれを見逃すわけもなく容赦なく拳を振り上げアレンの顔面にパンチをくらわした。アレンはその全体重がかかった重いパンチをくらい、すごく吹っ飛んでいった。
「へへ。どうよオレの実力は！見直したか？姉さん」
イッセーがこっちを向きながらVサインをしてニカッ！と笑ってきた。
ほんと、イッセーのあのエロエロな思考を除けば物凄くカッコイイのにね。もったいない。

「でもまぁ、関係ないっか。」ボソッ
「どうしたんだよ?姉さん」
「なんでもないよ。それよりも、確かに少しだけ認めてあげる。でもね――」
　すると、吹っ飛ばされた所から爆発と煙が舞い上がり、瓦礫が飛んできた。それを私が弾きイッセーが砕き難を逃れた。
　そして、そこから現れたのはアレンだった。見た目はボロボロなのに、何故かその表情は余裕そうだった。
「くけキャギャ・・・。これは流石に効いたなぁ。だがまぁ、俺には関係ないものだがなぁ!」
　グジュボキッベキバキグチャブチンッ!
　アレンの体は不快な音をたてながら元の姿に変形していく。見ているだけでとてもトラウマになる様な光景が目の前で起こってる。正直いって気持ち悪い。
「話の続きだけども、ちゃんと私に認めてもらいたいなら――」
　そうしながら私は『二十番機構・斬式大刀態《凌遅の鉈》――禍動』と小さく言い、いわゆる巨大な鉈（ナタ）を取り出した。
「あの程度・・・一撃で沈めなさい」
　フッ――ズバンッ!!
　そう言った私は元の体型に戻ったアレンの背後に一瞬で現れそれに気づかないアレンを容赦なく切り裂く。
「――断罪、完了」
　シャンっ・・・・・と音をたてながら手元にあった鉈は小さなルービックキューブに変わった。
　そんな様子を見ていたイッセーは、相変わらずだなと言いたげな表情をしながら苦笑していた。
「はぁ・・・俺もまだまだ修行が足りないかぁ」
「・・・・・まぁ、頑張りなよ。イッセーは私の・・・その・・・・自慢の弟なんだから、それぐらい余裕でしょ?」
「・・・・姉さん――ああ、そうだよな。俺は姉さんの弟、イッセーなんだ。それに俺には相棒のドラゴンがいる。もっともっと強くな

らなくちゃいけない。いや強くなって、いつか姉さんを守れる存在になるんだ！」
　イッセーが拳を握りながらそう宣言した。
「ふふ、うん。楽しみにしてる。早く強くなって私を守ってね？」
「おう！任せろ!!」
　私が言うと、イッセーはとてもいい笑顔で答えた。うん、イッセーならもう大丈夫だね。
「んじゃ、さっさとこの魂を回収して死武専に戻ろうぜ」
　すると、イッセーがそういいながら魂を持って、ポケットの中に入れた・・・・・・ってえ？
「ねぇ、イッセー。そう言えばイッセーはなんで魂回収してるの？私は自分でも食べれるし、相棒は何人？かいるからその子達に食べさせたりしてるけど、イッセーはどうやって？ドライグは勿論だけど魂なんて食べないよね？」
　すると、私の質問にまるで思い出したかのように両手をポンッと合わせて『そうだった。やっと思い出した』なんて言いながらこっちを向いてきた。
「それは勿論ドライグは魂なんて食べないさ。ただ、姉さんにはいま思い出したんだけども、ドライグは転生特典に元々入っていなくて、別のものを頼んでいるんだよ。ちなみにこれがその武器ね」
　イッセーが取り出したのは1本の剣と2丁の赤い――いや紅い拳銃だった。
「これは・・・・・・片方はあの『魔帝剣グラム』とわかるけど、その2丁拳銃はなに？」
「それは―『主よ、それは私が自分で話そう』――とそえか？なら頼むよ」
　突然拳銃が喋り出したので私はびっくりして拳銃を二度見した。
『初めましてだな主の姉よ。私の名前はヴラド。今回の制約者――つまり主となった近衛一誠に忠誠を誓ったものだ。以後主共々よろしく頼む』
　その声はまるで、どこぞの吸血鬼狩りの吸血鬼〃〇ルシングのアー

カー○〃さんだった。
「そうなんだね。ならヴラド？って言ったかな。イッセーを・・・弟を頼めるかい？」
『わかせておけ。私が責任をもって主を守ろう』
力強い声でそう宣言するヴラド
「うん。よろしくね。・・・・・・あ、そう言えば、ヴラドは人形になれるの？」
『なれるぞ？』
そう言うとヴラドが――紅い２丁拳銃が光だしたと思えば、そこには長身の男が立っていた。
「（うん。やっぱりへ○シングのア○カードさんじゃないですか）――うん。ありがとう、ヴラド」
『もういいのか？なら私は主の中に戻るとしよう』
そう言うと、ヴラドは霧のように消えた。
「そんじゃ～帰ろうぜ？姉さん」
「そうだね。イッセー」
イッセーの言葉に頷いた私は帰ろうとした。

――しかし

「――っ!?」
突然の事態に驚いた私とイッセーは同じ方向を見た。
「イッセー・・・・いまのは一体」
「わからない。でも何か良からないことが起きてるのは確かだ。だって――〝１００人近くいた人間の魂の反応が一瞬にして消える〟なんてありえないことだろ？」
そう、イッセーの言う通り、突然の事態と言うのは１００人近くいた筈の魂反応がほんの一瞬で一度に消えたのだ。そんなものを感じて驚かないわけがなかった。
「・・・・・・イッセー。とりあえず魂反応が消えたあそこにいこ。いつでも戦闘ができるようにしてね」
「ああ、わたかった」
お互いの目と顔を見て頷いた私達ふたりは急いでその場所へと向かうのだった。

「あそこだ！」
イッセーが叫んだ。例の反応が消えた場所に到着したようだ。どうやらそこは教会。それもけっこう大きなほうだ。
「ソウル・・・ソウルーーー!!」
すると、中からマカの悲痛な叫び声が聞こえてきた。
「――っ!?イッセー！急ぐぞ!!」
「おう！」
ドガァン!!

私とイッセーは扉を蹴り破り、前方にいた奴に向けて扉を吹き飛ばす。前方にいた何者かはそのまま吹っ飛んだ。
「――マカっ！大丈夫!?」
「・・・・フィ、フィア」
すると、マカは私に気がついたのかこちらを見た。すると、マカの目の前には身体を斜めに切られ血だらけになったソウルが横たわっていた。
「そ、ソウル!?急いで応急処置をしなくちゃ！」
私は慌ててソウルの傷口に手作り回復薬をかけた。ソウルは痛みで叫んでいたが、私が無理やり抑えて大人しくさせ傷口を閉じた。そのソウルには包帯を巻き、そのまま安静にしてと言って、マカに任せ、さらにこの状況の話を聞いた。
どうやらマカとソウルもこの街に任務で来ていてその帰りだったらしい。ただ、突然多くの魂反応が無くなり、元凶であるこの教会に来ると、クロナと言う人物がいたそうだ。その人物がラグナロクという名前の剣を使って攻撃してきて、いろいろあって、私を庇ったソウルが大怪我を負ったということだった。
ザシュ――ドンッ！
すると、何かを切る音と共に誰かが出てきた。おそらくマカの言ってたクロナという人物だろう。
「あれがクロナ・・・」
「また人が増えてるよラグナロク。もう、僕どう接したらいいのかわかんないよぉ」
「とりあえずぶっ殺せばいいんだよ！お前は鬼神だろ、しゃんとしろしゃんと！」
クロナとラグナロクと呼ばれた剣が喋っていた。てか、真っ黒の剣に赤い唇の口が付いてるって、なんかシュールだね。
「そうか、殺せばいいのか。気が付かなかったよ・・・ラグナロク。悲鳴共鳴」
「グピ、ピギャあああああ!!」
ラグナロクから、黒い波動の様な口の様なものがついた斬撃が飛ん

できた。
「八番機構・砕式円環態《フランク王国の車輪刑》――禍動！」
私は立方鎖で繋がれた車輪を出した。これは進行ルートを砕きながら進む道具だ。そして、繋がれた立方鎖を使いコントロールをする。
「はぁ！」
私はそれを斬撃に向かい投げた。車輪は地面を砕きながら斬撃に向かい当たった。斬撃はそのまま霧散してなくなったが、車輪はお構い無しに地面を砕きながらクロナに向かう。流石にこれには驚いたのか止まっていたが、ラグナロクにより慌てて回避した。
「イッセー！」
「おう！いくぞドライグ!!」
『任せろ』
「『禁手化（バランス・ブレイク）赤龍帝の鎧（ブーステッド・ギア・スケイルメイル）!!』」
そう叫んだイッセーは紅い全身鎧を纏って立っていた。
「ドラゴンショット!!」
ドウッ！
人ひとりを飲む込むくらいの大きさの赤い玉を撃ったイッセー。クロナはそれをラグナロクで防ぐが飲み込まれた。そして教会の奥に行き爆発した。
「大丈夫か！」
すると、シュタイン先生とマカのお父さんが来た。どうやら助けに来たようだ。
それから、シュタイン先生がクロナと戦ってなんとか勝利した。
すると、クロナが苦しみだし体から針のように突き出てきてトゲトゲしい身体となっていた。
「拒絶反応がおこっている・・・」
どうやら何かの拒絶反応とやらが働いているようだ。
すると、突然外から別の気配が感じた。
「――この気配、魔女か!?」

シュタイン先生がそう叫んだ。・・・え？あれが魔女？・・・・・パチュリーさんや魔理沙さんやアリスさんの方が断然強いね。会ったことあったけど。
「・・・あれは強大だよ。ソウルプロテクトが入っていたんだろう。魂をカモフラージュする魔法だ」
・・・へぇ～。あれがソウルプロテクトってやつなのかな？お父様やお母様がよく言ってたっけ。・・・と言うことは、私がいまもしているお母様に教えてもらったこれはソウルプロテクトってやつなのかな？
「ネークスネークコブラコブブラ・・・あなたたちもお仕置きよ。ベクトルアロー」
すると、魔女と思われし人物が蛇の様な形をした黒い矢印を飛ばしてきた。
「――てい」
ズバンッ！
とりあえず切ってみた。するとあっさり切れてちょっとびっくり。もっと特殊な何かと期待したのに・・・
「ふん！」
イッセーは掴んで殴った。流石にこれには驚いたかな。相手の魔女もなんかイッセー見て固まってるし。
「魔女狩り！」
シュタイン先生は鎌職人大技を出して防いだ。
「今日のところはこの辺にて失礼するわ」
そういいながら、クロナを担いで闇に消えていった。いきなり現れいきなり消えてって・・・・・・忙しい魔女だね。
「（まぁ、あのふたりの〝血の匂い〟と気配を覚えたからいつでも探せるけど）」
そう思いながら、イッセーを見ると頷いていた。どうやらイッセーも匂いを覚えたようだ。
前世でもそうだが、私達一族はもともと神龍を守護神として奉っていたせいか、ドラゴン並みの身体能力があるのだ。何故か。理由はわ

からない。その中でも特に嗅覚と聴覚と視覚が発達していて、体臭や血の匂いで相手を特定判別することぐらい簡単なのだ。

「さて、いろいろありましたが急いで死武専に戻って報告をしましょう。話はそれからです」

こうして、私達は一旦死武専に戻ることとなったのだった。

7話　ご挨拶

あれから、帰還してからソウルが病室に運ばれた。応急処置はしているが、それでも危険なためシュタイン先生が手術をしてくれている。私はとりあえずシュタイン先生に命に別条はないと言われたので安心して、べたべたした身体をシャワーで流している。ここのシャワーは男女で分かれているのだが、何故か私だけ専用のシャワー室ができたのだ。それに無駄に豪華で広い。

なんでも死神様が――――

『きみの姿は教育上、思春期真っ盛りの男子に悪いからねぇ。だから君だけの専用を作ることにしたんだよ！もちろん、シャワー室以外もあるよ』

・・・・・・と、言う理由らしい。

まぁそんなこんなでひとりの専用シャワー室なんだが、とっても広くてかなり快適だ。シャワー室なのに、お風呂もあり、一つの風呂場になっている。しかも、広さはだいたい大の大人が２０人くらい伸び伸びと入れるくらいの広さだ。だからかなり広いんだ。無駄に。まぁ、快適だからいいんだけどね。

「ふぅ・・・。そろそろ上がろうかな。」

私は浸かっていたお風呂から上がり、脱衣場で身体を吹き髪をドライヤーで乾かした後、着替えてシャワー室を出た。とりあえず、私はそろそろソウルの手術が終わった頃だと思い、ソウルのいる保健室の様な病室に行くことにした。

「むぅ・・・・・・。おそらくソウルの受けたあの攻撃は〝呪い〟が含まれているでしょうね。同じ〝呪われた者〟として共鳴するところがあるのでしょう。そんな感じがします。・・・・・・まぁ、呪いの原点と強度は全くの別物ですが・・・ね」

しばらく歩いていると、保健室が見えてきた。私はその扉に手を掛けようとした瞬間

「――――っ!?」
慌てて横に避けると、誰かが扉を蹴破り部屋に入った。
その誰かはブラックスターだった。
「大丈夫か!!ソウル!!」
「しっかりしろ!!俺様が来てやったぞ!!目を開けろ!!俺の笑顔はハッスルの源だぜ!!」
「ブラック☆スター!!!!」
ソウルを掴んでガクガクと激しく揺さぶるブラックスター。それを見たマカが叫ぶ。
ドガン!
「・・・・・・」ピュー
マカの辞書レベルの太い本でのチョップ。通称『マカチョップ』をくらい頭から血をピューっと出して倒れふすブラックスター。
「ごめんねマカちゃん。・・・・・・・・・マカちゃん?」
相棒の椿がマカに謝るがマカは黙ったままだった。しかし、その頬には涙の粒が落ち、マカはぐしぐしと目を擦った。
「えへへへ」
そのあと笑顔を作るマカになにも言わないで椿は何事もなかったのかのように振舞った。
「あらあらドア壊しちゃって。」
「あっ」
「ずいぶん賑やかね」
保健室に白衣を着た金髪で髪を胸元でくるくるに巻いている目つきの鋭い女性が現れた。
「「メデューサ先生こんばんわ!!」」
「オウ!ソウルを見に来たのか?」
マカと椿が挨拶を、ブラックスターがメデューサ先生に聞いた。白衣を着た先生ということは保健の先生でいいのだろうか?
「あの~マカちゃん?」
「!はい!何ですか?」
「足にへばりついているお父さんはがしてくれるかしら?」

すると、メデューサ先生が苦笑しながらマカにお願いをする。そして、メデューサ先生の言われた通り足元を見ると・・・
「白衣を着たマイ・エンジェル♥今日こそ君のメディカル・ラブで僕をいやしておくれ♥」
マカのお父さんが目を♡にさせながら、メデューサ先生の足に顔をスリスリしていた。
むろん、それを見たマカがマカチョップを食らわしにいったのだった。
「ねぇねぇ、椿。」
私は隣にいた椿にメデューサ先生の事を聞くことにした。
「なに?フィアちゃん」
「メデューサ先生って・・・・・なに?」
「メデューサ先生って言うのわね。ここ死武専の保険の先生で、すっごく面倒見が良くて優しい先生なの。死武専で怪我をしたら必ずお世話になるから挨拶をしようね」
「うん。わかったありがとう!椿」
「ええ、どういたしまして」
椿にメデューサ先生の事を少し聞いた後、私はメデューサ先生に挨拶しにいった。
「こんばんわメデューサ先生」
「ええ、こんばんわ。あなたは?」
「私の名前はフィア・キューブリックです。つい最近死武専に入ってきました。これからよろしくお願いします」
「私の名前はメデューサよ。保険の先生をしているわ。こちらこそよろしくね。フィアちゃん」
「はい♪」
私はメデューサ先生に挨拶をした後、椿の後ろにいった。
「それにしてもソウル君大変だったそうね」
「はい、すみません。私のせいなんです・・・」
すると、落ち込んだマカの肩に手を置くメデューサ先生
「元気だして!!マカちゃんはもっと強くなるわ!!」

そう言って励ますメデューサ先生
「・・・・・・!!はい!!」
その言葉に元気になったマカ。
「それじゃ、私は用事があるからそっちにいくわね。あまり暴れすぎないでね」
そう言いながら保健室を出ていったメデューサ先生。そして私はメデューサ先生をずっと見ていた。
「(・・・・・・あの先生。うまく気配を隠しているけど、〝魔女〟だ。それも、あの時出会った魔女。血の匂いが全く同じだからね。それにしてもなんでこんなところにいるんだろう?)」
そんな事を思いながら、今日を過ごしたのだった。

翌朝、私はイッセーと一緒にある所に行くことにした。それは・・・・・・
「はい。ここがデスシティーにある私の家だよ。」
「へぇ〜、ここが姉さんの家なのか。案外小さいんだな。」
そう。私が現在住んでいる家だ。
「そうだね。まぁ、見た目だけだけど。部屋はお父様とお母様の力で、和風の馬鹿でかい屋敷と同じ広さだから、1人じゃなんだか寂しいんだよ。だから、イッセーに一緒に暮らさない?って聞いたんだよ。・・・で、どうかな?」
「おう!・・・・・・と言いたいところなんだが、確か姉さんのこの家、実家と繋がってるんだろ?その姉さんのいまの両親に迷惑なんじゃ・・・」
すると、イッセーが申し訳ないといった顔でこっちを見てきた。
「心配しなくても大丈夫だよ。お父様やお母様はそんなこと気にしないし、そもそも誰かがいつでも来ていいように広く造ったそうだし、ましてやイッセーは前世とはいえ私の血のつながった実の弟なんだよ?お父様やお母様が私の家族を無下にするわけがないよ。それに、どちらにしてもいまから挨拶しに行くからね」
「え?」

すると、突然イッセーが固まった。
「どうしたの？イッセー？」
「いや・・・・・・いま、挨拶って・・・」
「うん。言ったけどそれが？」
「え？・・・・・・ああ、いや、なんでもない」
「ふ～ん・・・そう。へんなのイッセー」
そう言って私は家の中に入った。最初の目的地はもちろん実家だ。両親には既に話をしているから、いつでも来ていいそうだ。てなわけでれっつらごー！
「（いや・・・確かに前世では弟だったとはいえ、今は所詮赤の他人。そんな赤の他人が突然、お宅の娘さんと一緒に同棲します！――なんて言ったら、両親からすれば娘を突然家に上がり込んできた見知らずの他人に嫁として明け渡す。みたいな状態になるんじゃ・・・・・・やっべぇ。姉さんのことだ・・・絶対に深く考えてないぞ!?）」
「さぁ、行くよイッセー！」
「あ、え!?ちょ、まってくれよ姉さん!!!」
私はイッセーを少し置いていきながら、実家に繋がる扉を開けた。
ガチャ
「うん？・・・・・・なぁ、姉さん。もう付いたのか？」
「ん？そうだよ。まぁ、前話したと思うけど二人とも私とイッセーと同じ転生者だから、これくらい簡単らしいよ。」
「あぁ～そんなこと言ってたな確か。」
「ほらほら、そんなことはどうでもいいから早く来てよ。お父様もお母様ももう待ってるからさ！」
「え？・・・あっ、おう！」
私はイッセーを押しながらリビングに入った。すると、そこにはお父様とお母様が座っていた。対面の椅子が空いているから、そこに座れと言うことだろ。
「はじめましてだな。俺の名前は夜知昴。フィア・・・いや楓の父親だ。そんでこっちが――」
「私の名前は夜知桜です。楓の母親ですわ。よろしくね」

「あっ、はい。よろしくお願いします。俺の名前は近衛一誠といいます。」
　お父様はいつもの浴衣を着ていて、お母様はロングの髪でいつもの椿の花がある赤よりの茶色の和服を着ていた。
「さて、さっそく本題だが、君は転生者で楓の弟でいいんだな」
「はい。そうです。俺は前世で夜知楓さんの弟でした。先に、兄さんが死んで、そのあといろいろあり死にました。そこで俺は転生してもらってここの世界にきました。」
「なるほどな。ところで君はこの世界で両親はいるのかな？」
「いえ、いません。年齢的には小学低学年でしたが、はなから親がいない状態で転生したので、いませんでした」
「なるほど。・・・で、君は前世で実の兄であった楓と一緒に暮らしたいと」
「はい。そうです昴さん」
「お父様。私からもお願いします」
　私とイッセーでお願いした。
「・・・・・・・」
　すると、お父様はしばらく考えて
「・・・・・・仕方がない。許可をしよう。楓の実の弟だったなら私たちにとっても息子同然だからな」
「あ、ありがとうございます！」
「ありがとう！お父様!!」
「あらあら。ならイッセーくん。今日はここでご飯を食べていきなさい。いえ、今日はじゃないわね――今日から家族になるのだから、一緒に初めての夕食を食べましょうか。楓、手伝ってくれる？」
「は～い。お母様」
　私とイッセーが喜んでいると、お母様に呼ばれたのでついて行った。

「・・・・・・さてと。本題なのだが、イッセーくんは楓は好きかね？」
「ええ、大好きですよ？すっごくね」

「そうかそうか。なら、一緒に暮らすのなら楓に手は出さないでもらいたいな。私達の大事な〝娘〟なのだから」
「ははは。当たり前ですよ。手を出そうなら俺が殺されてしまいますから。てか、無理です」
「ならいいのだよ」
「でも、まぁ。兄さんが許可をした時は・・・・・知りませんけどね」
「――ほぉ。実の父親の前でそんな事を言うのかな？」
「はい。俺だって実の弟でしたので、言いますよ？」
「ははは。それは所詮前世の話じゃないか。いまは所詮赤の他人だろ？」
「えぇ、ですが・・・たとえ前世でいまは赤の他人だろしても、心が一緒なら問題まりませんから。てか、むしろ今ならチャンスというべきですよ。実の父親である昴さんなら犯罪でしょうけどね」
「いってくれるな、小僧。まぁ、いい。・・・・・・一番の問題は外で楓に変な虫がつくかどうか心配なのだが」
「それは大丈夫ですよ。常にそばにいますから」
「・・・・・・む？と、言うことは、イッセーくん。君も俺の同士と言うのかね？」
「――ふ。もちろん。兄さん――否、姉さんに近づく虫は・・・」
「息子――否、娘に近づく虫は・・・」
「徹底的に排除するのみ！」
「・・・・・・」
「・・・・・・」
ガシッ！
イッセーと夜知昴は手を固く握りながら、友情が芽生えたのだった。
「よろしく頼むな・・・・・・息子よ」
「――っ!?・・・・はい。お義父さん」
こうして、ふたりは本当の家族になったのだった。
「ねぇ、お母様。あのふたりは何をしているのですか？」
「楓。あなたには関係のないことなのよ。だから気にしないで上げ

て。あれが男の友情ってやつだから」
「へぇ～。そうなんですか」
「そうなのよ。（うふふ。楓ちゃんがいる所であのバカは何をしているのかしら？これは、ＯＨＡＮＡＳＩが必要かぇ？）」
「「――っ!?」」ゾクッ！
ふたりは悪寒を感じるのだった。

「さて、出来たわよ。楓ちゃん。そこにあるの運んでちょうだい」
「はい。お母様」
私はお母様の作った料理を運んだ。運び終えた料理はとても豪華だった。
「さぁ、みんな座ってるかな？それでは手を合わせて、いただきます」
「「いただきます！」」
こうして、私達は新たに家族としてイッセーを迎え、初めての食事を美味しく楽しく笑いあったのだった。

昼食を終えて、私とイッセーはお父様とお母様と別れ、デスシティーに戻ってきた。
「さて、イッセー。今日は楽しかった？」
「おう！楽しかったぜ。久しぶりに姉さんとご飯を一緒に食べれたし、何より家族でご飯を食べたのがかなり久しぶりだった」
私がイッセーに聞くと、とっても嬉しそうに答えた。
「そうだね。それに、今日からイッセーも私たち家族の一員なんだよ？それを忘れないでね」
「ああ、わかってるよ。・・・それにしても、家族かぁ・・・・・・ふふ、まだ実感がわかんねぇーぜ♪」
「ふふふ、そりゃそうだよ。まだ家族になったばかりなんだから。・・・これからも、家族としてよろしくね？イッセー」
「おう！こちらこそよろしくな姉さん!!」
私とイッセーは笑いあった後、お風呂に入って部屋に戻ろうとし

た。そこで、私はイッセーを止めた。
「イッセー。今日は久々に一緒に寝よ？昔みたいにさ」
「・・・え？」
すると、イッセーが固まった。とても驚いた顔で。
「・・・・・・なに？・・・・・一緒に寝るの・・・いや？」
私は不安でイッセーを見ると、イッセーは顔を紅くしながら勢いよくぶんぶんと横に首をふっていた。そんなことしたら首痛めるよ？
「いやいや！むしろ一緒に寝かせてください！ただ、姉さんが突然そんな事を言ったのに驚いただけだから！さぁ、いこうか！（やっべぇ！姉さんの上目遣いやべぇーーー!!!!）」
「そ、そう？ならいいんだ。さぁ、寝よっか。イッセー♪」
「おう♪姉さん――いや・・兄さん！」
こうして、私とイッセーは一緒のベットで一緒に寝るのだった。・・・・・・おやすみ。イッセー・・・。

翌朝・・・イッセーがドキドキしすぎて眠れなかったのを楓は知らないのだった。

8話　妖刀

―無　side―

ここは死武専……死神がいる部屋である。
そんな部屋には2人の人物がいた。
死神とブラック☆スターのパートナー、椿である。

「妖刀マサムネ……彼もこのままでは【鬼神】になっしまう」
椿に話す死神
「……本当にやるのかい？つらい戦いになるよ…」
「…はい!!」
死神の言葉に強く返事をする椿。
「妖刀マサムネは妹の私がこの手でとめます!!」
強く宣言した椿の瞳は覚悟の炎が宿っていた。
「ブラック☆スターは何て？」
「私に魂を預ける」と言ってくれました」
「うん。いいパートナーを持ったね♪」
「はい♪」
死神の言葉に嬉しそうに返事をした椿。その顔はとても笑顔だった。

椿とブラック☆スターが妖刀の魂狩りに行った後、死神の部屋にはシュタイン博士が一緒にいた。
「それで行かせたんですか？ブラック☆スターと椿を……」
そんな中、シュタインが死神と話をしていた
「相手は妖刀…〝鬼神の卵〟ですよ。僕と戦った補習とはワケが違います…。妖刀は僕かもしくはフィアがたたくべき相手です。」
シュタインの顔はとても険しくなっており、冷や汗のようなものがひたいから流れていた。
「そうだね…」
いっぱくおいて死神が話し出す。

「でもね……マサムネは死武専の敵である前に椿ちゃんの兄だ…。あの子は衝動的に物事を決める子じゃない――…死ぬ覚悟だってできている!!」
死神のその一言によりシュタインは黙るのだった。

東アジア『針の村』。ここは村のあちこちに長い白色の針が飛び出ている文字通りの針の村なのだ。
そんな場所に、ブラック☆スターと椿の2人が訪れていた。
「ひゃっはぁああ☆」
「……壊さないでよ…」
ブラック☆スターは村の中心に置かれていた謎の像の頭の上に乗り、いつもの如く叫んでいた。そんなブラック☆スターを心配そうに見ている椿である。
「こんなド田舎に俺様のようなスターが来てやったぞ!!ありがたく思え!……それにしても、こんな村が何で妖刀のターゲットになったんだ?」
「ここの村人は魂の質がいいのよ」
ブラック☆スターの疑問に答える椿。
「コラ!!村の守護神に乗るな!! バチあたりめが!!」
するとそこへ1人の村人と思われるハゲのオッサンがやって来た。
「む?」
ブラック☆スターが大人しく降りると……
「なんだジジィ!!さてはお前が妖刀か!!」
村人に突っかかっていた。
「早速オヤジ狩りかよ!!都会者はこわいのうぅ~」
「私の兄がこんなにお年よりなワケがないでしょ!」
椿がブラック☆スターを止めると今度はオッサンが2人を見ながら腰を振り出した。
「何を言う!!俺はまだ昼も夜も現役だぞ!!」
腰を振りながらそう言う村人。
「ほれ見ろ!こいつが妖刀だぜ!!」

「……」
ブラック☆スターは指を指しながらそう言って、椿は沈黙していた。
「どうしたの？じいちゃんの客人？」
すると、そこへまた別の村人が来た。それも、頭にバンダナを巻いた目つきの鋭い少年だ。
「お前が妖刀かぁ!!」
「私の兄よ！どう見ても私より年下でしょ…」
「あらあら♪リョクちゃんのお友達かね？」
すると、今度はまた別の村人がきた。体格の大きなオバサンだ。
「もしやお前が――…モゴモゴ」
「もういいって……」
椿は、叫ぶブラック☆スターの口を強制的にふさいだ
「!!」
すると、少年…リョクの瞳がブラック☆スターの右肩の刺青に気がつき驚きに染まったと思えば、目つきがするどくなった。
「”星族”がこの村に何の用だ!!――また俺たちを殺しに来たのか!!」
「!?」
「その肩の刺青!!お前”星族”の生き残りか!?」
リョクに続きオッサンの叫び声で次々と集まってくる村人。その瞳は全てブラック☆スターの肩にある星形の刺青にいっていた。
「星族…？」
椿が疑問そうにブラック☆スターを見ると……
――ヒュッ！　パシッ
「金――…？」
ブラック☆スターは飛んできた五〇と書かれたお金を掴んだ。
「お前ら”星族”は金のためなら何でもやるんだろ！そいつをやるからとっとと出てけ!!」
リョクがブラック☆スターに対して睨みながら叫んだ。
「……チッ。この村もかよ…」

「出てけ!!」「出てけ!!」
「来んな!!」「死ね！星族!!」
ブラック☆スターと椿に対して石を投げる村人達。
「ふんぬぅ!!」
すると、リョクの次にきたオバサンが、大岩を持ち上げながらブラック☆スターを睨み、慌てて逃げるのだった。
――ポツ…ポツポツ―ザザァーー！
ブラック☆スターと椿が逃げ切ると、すぐに雨が降ってきた。そんな中、村を見渡せるほどの大きな木の枝に座っておりブラック☆スターと椿はそこで雨宿りをしながら村々を見渡していた。
「クソ……雨が降ってきやがった…。俺はマカみたいに”魂反応”を感知できないからな…。妖刀の存在を確認するには五感に頼るしかない。でも…こう雨だとねぇ～。五感が鈍っちまう」
「……」
「……さっきの村でのコトが気になってんのか？」
「エ!?いや…別に…そんなんじゃ――…」
「グダグダ長ぇ昔話すんの好きじゃねぇんだよ…」
「はい…もう聞きたそうな顔はしません…」
その言葉を最後に静かになる2人。
「……」
「……」
ブラック☆スターは椿の顔を見ると、椿はしょんぼりとした顔をしていた。
「あ～もう!!わかったよ!!　俺様ぐらいのスターになると聞こえて来るんだよ客の声が!!『くだらねぇ回想入れんじゃねぇーぞ!!』ってな!!」
ブラック☆スターが叫び、ぽつりぽつりとしゃべり出す。
「前にもあっただろ？肩の星の刺青を見て知らねぇオッサンが急につかみかかってきたことが――…」
「はい」
「俺の一族は”星族”って言ってな、金のためなら何だってやる有名

な殺し屋の一族だったらしい……。
　いろんな人間を殺し回ったあげく、ついには力を求めて人間の魂にまで手を出した……」
「……」
「俺はその”星族”の唯一の生き残りだ」
「知らなかった……じゃあ、今その一族って…？」
「13年前…全員魂を取られたよ。死武専にな…」
「――…!!」
「俺はまだ赤子だったからなそのまま死武専に引きとられたってワケ…はい!!おしまい!!」
「…ブラック☆スターは死武専を恨んでいるの？」
「別に。俺にまだちょっとしかスター性がなかったトキの話だぜ!?知ったコトかよ！オヤジもオフクロもとんだ超えちゃいけない所まで超えた、悪党だった…で　殺された…それだけの話さ…」
「だけどそのせいで関係のないブラック☆スターが恨まれるのって…私…何かイヤだわ…」
「ぷっバカかお前♪そのおかげでさっき目立ってたじゃねェかよ☆」
「…」
「ひゃはははは☆」
「クス♪（ウソばっかり…ブラック☆スターは憎まれるコトで目立ちたいワケじゃないのに…）」
「！……雨が強くなってきやがった…」
　――……その頃、針の村にて、1人の男が訪れていた。
　ザァァァァ――
「我思ふ　寝る？　遊ぶ？――いな。喰う!!」
　ピシャーン!!

　一方その頃、死武専の死神の間にて。マカとソウルが死神に詰め寄っていた。
「どういう事ですか！死神様！どうしてあの2人を行かせたのですか!!」

「ちょちょ、ちょおっと落ち着きなさいよ！　てゆぅか、誰が呼んだのぉ？」
「……」
　すると、シュタインが手と首を横に振り知らないとアピール。
「死神武器職人専門学校、校則第１１８条。緊急の場合は生徒も入っていいや…の決まりがあります！」
「えぇ！そうだっけ？」
　死神がマカに顔を近づけながら困った様な声を出した。
「妖刀ってのはどんな奴なんだい？父上」
「「ん？」」
　そこへ、キットとトンプソン姉妹がきた。
「キット…君もかい」
「まさか、魔剣みたいな奴じゃないだろうなぁ」
「魔剣…」
「妖刀に魔女はついていません。逆に１人だからこそタチが悪いと言えます。妖刀は人の心にある恐怖に付け込み自分を手にしたものの魂に憑依し、その肉体を操る。そして魂を食い尽くす。――このままでは、彼も鬼神に…」
「……そう。妖刀というのは、それほど危険な者なのです。はっきり言いますと、人口的に造られたあの時の魔剣と違い遥かに危険だと言えますね。」
　すると、そこへシュタインの後ろからフィアとイッセーが来た。
「フィアちゃんにイッセーくん。君たちまで来たんだねぇ……」
「えぇ、そうですよ死神様。……で、話を戻しますが、妖刀と言うものの多くは、何かしらの理由で力を求めるため魂を喰らい尽くす事で、妖刀となったものが多いいです。ですが、妖刀の中にも悪人と善人がいます。悪人がいま椿とブラック☆スターの２人が追っている妖刀。そして善人と呼ばれるのが私のお母様です」
『え!?お母様!?』
　すると、死神とシュタイン以外が驚いていた。
「フィアちゃんのお母さんは生まれついての妖刀でね～。妖刀と呼ば

れるのは二種類あってねぇ。先天的な妖刀と後天的な妖刀の事なんだよ。そうでしょぉフィアちゃん？」
「はい。死神様の言う通りです。妖刀として生まれ持った先天的な妖刀と、最初は普通の刀だったが魂を喰らいすぎて妖刀となった妖刀の二種類です。
先天的な妖刀がお母様で、後天的な妖刀が今回のターゲットです。
先天的な妖刀と後天的な妖刀の大きな違いは”純粋的な強さ”にあります。後天的な妖刀は魂を喰らうことで力を増しましたが、先天的な妖刀は生まれた時にはすでに、武器でいいますと”デスサイズ”並の力を持っているのです。それこそ、名のある”妖刀”となれば神様すらも殺すことができる程の力を持っているほどです。
まぁ、それで有名なのが”五大妖刀”と呼ばれているのがそうですね」
『五大妖刀？』
今度は死神様以外のメンバーが首を傾げる。
「はい。妖刀　村雨・村正・紅桜・虎徹・砕月の５つで、そのうちの１人、村正こと『村正このは』が私のお母様になります」
『……』
フィアの衝撃の一言に、声も挙げれずただ唖然とする一同。
「そう。フィアちゃんの母親はデスサイズの１人でねぇ。それも、デスサイズの中でも１番力を持っているのよねぇ。で、そこパートナーであるフィアちゃんの父親。夜知昴くんもかなりの実力者でねぇ。そこにいるシュタイン君の先輩でもあるんだよ」
そこへ、死神が説明を付け足した。
「……え？そうだったんですか？……とと。話が逸れていました。で、話を戻しますが今回の相手は妖刀の後天的な奴です。後天的な妖刀の多くが今回の敵の様に、力を求める為に善人の魂を喰らった奴です。そのためかなりの危険人物となっています。ですので、ブラック☆スターと椿が勝てるかわかりません。正直いいますと勝てる見込みは低いです。でも、私は信じます。あのふたりが必ず勝って来るこ

とを……
　皆さんはそうではないんですか？」
「いや。フィアちゃんの言う通りだね。私達が信じなくてどうするって言うのよね。」
「あぁ、ブラック☆スターと椿があんな奴に負けるはずがねぇ。」
「確かに。あのふたりは必ず勝ってくるだろうな」
「あぁ、だてにスターなんてさけんでないしな。実力は本物だし」
「あははは！絶対に勝ってくるよ～！」
　それぞれが感想を言っていたのだった。
「（……あれ？俺ってなんでついてきたんだ？）」
　そんな中、イッセーが出番の無さになぜついて来たのかわからなくなっていたのだった。
「イッセー？どうしたの？」
「……え？あ、いや。なんでもないよ姉さん。ただ、なんで付いてきたんだろうなぁなんて思ってただけだからさ。」
「……あぁ～。ほんとだね。いま初めて喋ったもんね。」
「まぁ、いっか。それに、どうやらあっちは展開がすすんだみたいだしな」
「ん？……おぉ、ほんとだ」
　みんなの視線の先、等身大の大きな鏡があった。鏡には映像が映っていて、そこにはブラック☆スターと椿が村の少年リョクと戦っていた。リョクの様子はおかしく、目は黒く瞳は赤くなっており、顔には紫色の線の不気味の模様が出ていた。そして手には不気味な刀を持っていた。おそらくそれが妖刀なのだろう。
　ブラック☆スターと椿が戦っており、雨の中ブラック☆スターが滑って股を強打した所だった。そのシーンを見た男性陣は思わず手で股を隠し内股になってしまったのだった。
『時代が俺に追いつけねぇとはな…俺が生まれるのが早すぎたってことか…。速☆星（スピードスター）…ディープだぜ』
　ブラック☆スターはどうやら、スピード勝負に望んだが天候は雨。そのためスピードの出しすぎで足を滑らせ男にとって重大なダメー

ジを負ってしまったようだ。
「……ブラック☆スターはなにをしてるんだ？」
「……それは言わないであげてよイッセー。彼だって頑張ってるんだから」
「そうは言ってもなぁ……まぁ、まだ諦めてないようだし？えらいボロボロだけども大丈夫と信じようか」
「そうだね。まぁ、仕方が無いよ。妖刀のほとんどが影を操ることができるもん。それも、あれほど影を操れる程の実力を持ったヤツんだ。ただでさえ格上の相手なのにさらに実体化した影のせいで２対１になってるんだもの。苦戦するのはしかたがないよ」
　そう２人が話をしている中、ブラック☆スターと椿の戦いは展開を進め、技の一つで決めたブラック☆スターのスキを狙い椿が妖刀の意思の中に入った。そんな椿を見守るようにブラック☆スターはドカッと胡座をかいて座り、椿と妖刀の行く末を見ていたのだった。
　そんなブラック☆スターをリョクとは別の村の少年が木の棒を持って頭を殴っていた。殴られた所からはダラダラと血が流れてくるが、ブラック☆スターは眼中にないかのように無視していた。
「ははは。ブラック☆スターの”眼中にない”っぷりがすごいねぇ～」
「妖刀と椿ちゃんが兄妹だったなんて……」
「でも、ブラック☆スターはその事を知らないんだろ？」
「うん。ブラック☆スターは椿ちゃんのコトを信じてるからねぇ。」
「椿ちゃん…大丈夫なのかな……」
「父上…椿がさっきから動いてないけど……何やってるんだい？」
　すると、キットが死神に質問をしていた。
「うん…椿ちゃんはねぇ～……」
　すると鏡が変わり、後ろで弁当を食べていたシュタインに変わる。
「え～とですね…、簡単に言うと…椿とマサムネは魂の引っ張り合いをしてるワケです……
　椿は妖刀の特殊能力…”魂憑依”で魂。乗っ取りに来たところを逆に吸収してやろうと奮闘しているようですね。」

「ミイラ取りがミイラになるか……しかし椿に勝算はあるんですか？」
「……難しいですね…。戦いの場は相手の箱庭ですし、魂の引っ張り合いは妖刀の十八番…椿が勝てる確率は極めて低いですね。この戦い…無謀としか……」
「お～んお～ん！兄妹で殺し合いだなんて…私はパティーなしの人生なんて考えられないってのによぉ～～…」
「人生なんとなかなるもんよ♪おねェちゃん」
「あんたみたいにカワイイ娘いないからね!!変な男に騙されない様に…おねぇちゃんがしっかり守ってやるからね!!」
「よしよし」
　泣きながら抱きしめる姉の頭を撫でる妹。立場が逆転しているきがする。
「心の弱さが鬼神への道を選ばせる……初代鬼神は”死”の恐怖から開放かれるために”力”を求めた……妖刀マサムネは何故”力”を求めこの道を歩んでしまったのか…」
　そんな中でシュタインが呟いた。
「……ねぇさん。これは俺の勘だけどさ。妖刀マサムネが妖刀としての道を選んだのって…もしかして家の関係なんじゃ……」
　すると、イッセーが隣にいたフィアに小声で喋りかけていた。
「――うん。そうだよイッセー。椿ちゃんの一族はね、代々伝わる特殊な武器一族なんだよ。その家の初子（ショシ）はね先代の能力を全て受け継がれるの。その能力こそ、『手裏剣』『けむり玉』『変わり身』『忍者刀』そして『日本刀』。この五つの能力を全て、家の初子であるあのマサムネが受け継がれるはずだったんだけども、突然変異なのかマサムネに与えられたのが『日本刀』だけ。他の能力は全て椿ちゃんに受け継がれたワケなの。
　その後、どういう経緯で妖刀になったのかは知らないけれど、確実に言えることは家での関係なんじゃないかな。じゃないと、こうして戦ってないしね。」
「……なるほどな。ようするに兄妹喧嘩ってやつか」

「……う～ん。ちょっと違うけれども…まぁそんな感じじゃないかな」
『椿――…死武専の入学式…あの時やった俺様のステージおぼえてるか!?俺はおぼえてる!!』
「あのトキお前は俺様のステージを最後まで見届けてくれた!!
今度は俺が見届ける番だ!!」
子供「何だ？この女（ツバキではない）…さっきから全然動かないぞ…
お前もこの村から出てげェ!!」
子供は持っている棒を振り下ろした…だが
パンガシッ
★君は棒の本体を受け止め、私は棒の先を受け止め…
★『オイ…ガキ…　今度　椿の戦い（ステージ）の邪魔しやがったら…』
――メキメキ……バキッ
おもいっきりおり…
『殺すぞ。』
ブラック☆スターはおもいっきり睨んだ
『う…』
『黙ってそこで見てろ!!』
『うるせェ!!星族!!』
子供は棒をブラック☆スターに投げつけた
「ブラック☆スター……男だねぇ～」
「あぁ、確かにな。でもねぇさん。いまのアイツの場合”男”って言うより”漢”だな」
「……ふふ。まぁ、そうかもね」
フィアとイッセーが呑気に笑いあってると……
「確かに椿は”多変型高性能武器”だけど相手が悪すぎます…。勝てるハズがない……。死神様に止められても僕が行くべきだったんです」
「……」

シュタインが諦めたかのような声でそう言うと、死神は小さく嘆息した。
「椿ちゃんの魅力は確かに〝多変型〟という特殊なものにあるかもしれない…。だけど彼女の強さなそこじゃない――…」
「〝魂〟だよ」
死神は最後の方だけ強く言った。
「死神様の言う通りですよシュタイン先生。椿ちゃんを…自分の生徒を信じてあげましょうよ。私は信じます。だって、椿ちゃんが負けるはずがありませんから。」
とてもいい笑顔で言い切ったフィア。その様子に驚くシュタイン。
「あなたもそう思うでしょ？イッセー」
「あぁ、俺だってあの2人が負けるはずがねぇと思ってる。あの2人なんだ。簡単にくたばったりしねぇよ」
フィアに聞かれたイッセーも、フッ…とキザっぽくそう言って笑っていた。
「……ほら。この子たちもこう言ってるんだしシュタイン君も自分の生徒を信じなくちゃねぇ。き～っと大丈夫だよぉ～。あのふたりならねぇ」
『!!――椿!!』
すると突然ブラック☆スターが叫ぶ。
「椿ちゃんが妖刀の中に入っていっちゃう!!」
マカが叫ぶ。そう、椿が妖刀の中に肉体ごと吸い込まれたのだ。その唐突な出来事に一同は驚きで固まっていた。
しかし、その中でもフィアとイッセーは落ち着いていた。…なぜなら――…
「……どうやら、決着がついたみたい」
「――あぁ、だな。」

ここは、妖刀の中。そこでは1組の男女がいた。椿とマサムネである。先程まで激しい攻防戦をおこなっていて、いままさに決着がついた所だった。

マサムネの持つ日本刀が椿の胸に深く刺さっていた。
――だが
「お前の気持ち…見せてもらった…。椿の花…”香りのない花”か……」
マサムネが手に椿の花を持ち、匂っていた。
「否。」
そして、手に持っていた日本刀をすこし手放した
「お前の魂に触れて気づいたよ…」
「兄さん…」
マサムネの体は徐々に消えかけており、椿はマサムネの手を取りそれを見届けていた。
そして――…
「いい香りだ」
マサムネの体が消滅し、魂だけとなり、その魂は椿の胸にへと吸い込まれ消えていった。
「兄ぃ…さん……」
椿は優しく、そして悲しそうにそっと強く胸を抱いたのだった。

一方その頃、妖刀の外では……
「…ジジィ!その棒よこせ!!」
――パシッ!
「ひぃいい」
ブラック☆スターはオッサンから木の棒を横取り妖刀をつつき始めた
「オイ!!椿!!椿なんだろ!!!出てこい!!コラ!!負けてねェよな!!お前のステージはこんな終わり方じゃねェだろ!!」
つんつんとひたすらつつくブラック☆スター。
「アンコール!!アンコール!!アンコール!!」
ひたすら妖刀に棒でつんつんしているブラック☆スターだったが突然妖刀に反応があった。
――ボン

「うわぁあ!!?」
妖刀が突然、煙をあげて破裂。モクモクと煙が晴れるとそこには――…
「!!　椿…？」
「ただいま…ブラック☆スター…」
椿が立っていた。
「兄さんに会ってきました」
「そうか…おう!!おかえり!!大丈夫か？」
「はい」
「本当に平気か？」
「エエー…平気よ♪」
ブラック☆スターの質問に答える椿。
しかしブラック☆スターは椿をじっと見つめる。そんな椿は無意識なのか目を逸らして表情は暗かった。
「ほら、来な!!ブラック☆スターがだっこしてやるよ!!」
「…!!」
ブラック☆スターが”にかッ”と笑顔で手を広げた。
椿は突然のことで驚いていたが……次第に涙が溢れてきて――…
「うっ　おっ　おっ　へっく　うっ――うわぁぁん！」
ブラック☆スターに抱きつく椿。そんな椿の頭をポンポンと軽く叩くブラック☆スター。
「おっおっ……ごべんね。ブラック☆スター血だらけだよ…大丈夫？」
「俺のコトはいいから……」
ブラック☆スターが喋っている瞬間――
――ゴンッ！
「!!」
ブラック☆スターは後ろから思いっきり木の棒でなぐられた。
「うへへ」
殴ったのは最初に木の棒で殴って椿をも殴ろうとした鼻水の垂れまくった坊主の少年だった。

「てめェ～はよォオオ!!!」
　とうとうブラック☆スターの堪忍袋は切れてしまい……
「死ね!!」
　――ゴッ
「エエ…!?」
　思いっきり蹴飛ばした。そんな様子を見てしまった椿は思わず驚く。
「ぼっちゃ～～ん！」　グシャ！
　遠くでは蹴飛ばされた少年が地面に落ち、それを大岩を投げていたオバサンが拾いに行く。
　すると、しばらく気を失っていたリョクが目を覚ました。
「生きてたか…よかったな…」
「!!」
　すると、また村人たちが集まってくる。
「星族最悪…」「あんなカワイイ子供を…」
「人間じゃない」「出てけ」「出てけ！」
　次々に罵倒を繰り返す村人。そんな村人に対してブラック☆スターは耳をほじりながら嘆息していた。
「あ～あ～この村の負け犬どもはいつまでもしつこくケツでほざきやがって
　うるせェーんだよタマなしがよォ…!!
　お前らの過去なんか興味ねーんだよ俺は過去なんか気にせず前へ進むぜ!!」
　――ブチッ
　そんな音が村人全員から聞こえた気がした。
「ふざけんな出てけ!!」「出てけ!!」「2度と来るな!!」
「こんなド田舎誰か来るかよ!!さっさと滅びちまえバーカ!!」
「ごめんなさい…ホントはいい子なんです…」
　村人に石や岩や木の棒などを投げられながらも、最後まで挑発するブラック☆スター。
　そんな場面を見ていたリョクは……

「あいつは星族じゃなくても好きになれないな…」
すこし笑いながらそう言うのだった。

その頃、死武専にて……
「――ほらね。シュタイン先生、私の言った通りでしょ？」
「あぁ、確かにそうですね。どうやら僕の検討違いでした。教師としてまだまだですね」
フィアがドヤ顔でシュタインに言っていた。そんなフィアを苦笑しながらもシュタインは嬉しそうに言うのだった。
―ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―
―フィア　ｓｉｄｅ―
ハロハロ皆様ごきげんよ～。……って誰に挨拶してるんだろう？……ま、いっか。
「そろそろ帰って来ますかね。あの２人は……」
隣にいたイッセーが死神様に聞いていた。……すると、遠くから２つの足音が聴こえてくる。どうやら帰って来たようだ。
「なぁ椿…？妖刀を倒して過去の決着はついたけど俺の武器を続けるか」
――聞き耳を立てているとブラック☆スターの話し声が聞こえてきた。どうやら椿ちゃんに今後のコトを聞くようだ。
「え…!?」
一瞬驚いた声を上げる椿ちゃん。すると、目を閉じすこし考える様な仕草をしていた。
（私はブラック☆スターと前へ進んで行きたい…）
目を開けた椿ちゃんは、とてもいい笑顔になって――
「はい♪」（この子が相手だと素直になれる…）
とても元気に返事をしていた。
「オウ!!」
そんな椿を見たブラック☆スターもいい笑顔になっていた。
さて…皆も揃ってるし、あちらがまだ気づいていないようだしいいかな？

皆――「「「「「「おかえりなさい!!!」」」」」」
「!!／!?」
「オ…オウ…お前らもな…」
「御心配おかけしました!!」（ペコリン
珍しく照れてるブラック☆スターに、お辞儀をする椿ちゃん。みんな無事に帰ってきてくれて嬉しいね。
「お～すっ。おつかれさ～ん♪」
死神様が労いをいい。
「すごいよ二人とも!!」
「ついに”魂”1個ゲットしたな！」
続いてマカとソウルが言う。
「本当に無事で何よりだよ。椿ちゃんも、本当に無茶をするよねぇ～。見てるこっちはヒヤヒヤしたよ。……でもまぁ、これだけはちゃんと言わないとね。
お帰りなさい、そしておつかれ様。二人とも♪」
「おつかれ様だな。ほんとうに凄いぜお前ら！流石だよな！」
私とイッセーがサジを送った。
しばらく、わいのわいのとしていると、シュタイン先生と死神様のしゃべり声が聞こえてきた。
「死神様…僕はあの子たちを過小評価していたかもしれませんね」
「みなさん育ちざかりの若人だからねェ」
……確かにね。本当に成長って早いものだよねぇ～。
「オイ!!お前らに見せるモノがある!!」
……おろ？なんか気づいたらブラック☆スターが鏡の上に乗って叫んでいた。何してるんだろう？
「なんとォ!!椿に新しいモードが追加されたァ!!」
『!?』
ブラック☆スターの言葉に驚くみんな。私もまさか、そう来るとは思ってなくてすこし驚いていた。
「行くぞ!!椿!!」
「はい!!」――ポンッ

椿ちゃんが煙になる。
「モード『妖刀』!!」
ブラック☆スターが叫ぶと煙がブラック☆スターの右手に集まり徐々に形を形成していき……
「おぉ　おおぉおおおぉ!!!」
日本刀がブラック☆スターの手元に形作った。
……あれ？でも妖刀ってかなり力を使うんじゃぁ
――ぱた
……あ、やっぱり倒れた。
『……』
全員があまりにも唐突で拍子抜けな出来事に言葉が出なく固まっていた。
「ブラック☆スター!!」
「あわわ。〝魂の波長〟を一気に持っていかれた…」
元に戻った椿が慌ててブラック☆スターを抱えるとブラック☆スターはぐで～っとしていた。
「今のブラック☆スターにはまだ扱えないようですね。しかし…驚いた…兄の力まで受け継ぐとは…」
「……それに関しては私も同じです。椿ちゃんの家。中務家の事は知っていましたが、まさかあのような形で受け継ぐなんて思ってなかったです。時に人間ってわからなくなるものですよねぇ～」
「ホホホだけどこれで鬼神を1人止められたし…
ホントおつかれさ～ん♪」
膝枕をしながらパタパタと団扇でブラック☆スターをあおぐ椿ちゃん。……はたからみれば、仲のいい恋人みたいだなぁ。
「ふむ、これにて一件落着！――ってね♪」
「だな！」
私は懐から出した〝一件落着〟と書かれた扇でそう叫んだ。イッセーも続いて叫ぶのだった。
二人とも……本当におつかれ様でした♪

9話

さて、話は戻るがいま現在、倒れたブラック☆スターは椿に膝枕されながらうちわであおられていた。
「……あぁ、そういえば…フィアなら妖刀モードの椿くんを使えるんじゃないですか？」
――と、まるでふと思いついたかのように言うシュタイン博士
『えええええ!!?』
その発言に死神様とシュタイン博士、そして寝込んでいるブラック☆スター以外のみんなが驚いていた。
「確かに椿姫ちゃんならできそうだねぇ」
……と死神様が
「姉さんなら余裕だな」
『確かにな。相棒の姉ならできるだろう。』
死神様に続いてイッセーと相棒のドライグも言う。
そこで私は少し考え結論を出した。
「……ん～まぁ、出来ないことはないと思いますが…」
「じゃあやってみて!!フィアちゃん！」
「見てみたいしな」
すると、興味を持ったのかマカとソウルがランランとした目で見てきた。
「う、う～ん…椿できます？」
「はい！大丈夫ですよ♪」
私は椿に聞くと即答で返事が帰ってくる。……もう少し迷ってくれると嬉しいのですが……まぁ、いいです。
「じゃぁ…」
私はいつの間にか起きて移動していたブラックスターにガン見されながら椿に近づいていき、椿の差し出された手をかるく握る
――ポン
軽い音と共に椿は妖刀モードに切り替わる。
おぉ～。たしかにすごい魂の波長だ。これだけ巨大な力なら、いく

らタフが売りのブラックスターでも、そりゃすぐに力尽きるよね～。
……とゆうか本当に『魂の波長』持ってかれてる…
まぁ大丈夫かな。他の”妖刀”で慣れてるし。何よりも、母様の方が上だしね。
「おぉ～すごい持ててる～！」
「ブラック☆スターより持ってる時間が長いぞ！」
「うむ。流石だな」
「すげぇな、アイツあんなにも軽そうに持ってやがるぞマカ」
「うん。流石フィアちゃんだね！　ねぇ、そう思わないソウル？」
「ああ、そうだな」
マカやソウル、一緒にいたトンプソン姉妹
「……それで。持ったけどもどうしたいの？」
私がそう言うと、シュタイン博士が手を上げて発言してきた。
「どうせなら誰かと戦ってみたらどうですか？」
「え、えぇ～……面倒です」
「いいですね!!」
「俺らと戦うか？」
「いいや俺達の方がいいだろう」
「え～私達が戦うの!!」
「そうだ！俺とマカのコンビで戦った方がいいに決まってる！」
マカとソウルそしてキッドの3人が話、キッドの発言にマカがわがままを言っていた。
ギャーギャー
そんな2組を見かねてかイッセーが手を上げた。
「なぁ、マカ達の方がいいんじゃないか？」
「何故だ!?」
イッセーの発言に驚き声を上げたキッド
「だってなぁ妖刀は刀だぞ？なんで飛び道具と戦うんだ」
イッセーは『それに…』と言ってまだ話す
「まだソウルは病み上がり、フィア姉さんはまだ椿の妖刀モードに使い慣れていない…そうなるとマカ達の方が都合がいいだろ？」

イッセーには珍しくまともな事を言っている。まぁ、たしかにソウルは先の戦いで病み上がり、そんでもって私は椿に慣れてない……と。傍から見たらそうなるねぇ。
でもねぇ…ぶっちゃけ私はどっちでもいいんだよねぇ。この程度で負けてちゃ、父様と母様の超絶コンビの鬼修行の意味がなくなっちゃうからなぁ……もしも仮に負けたとしてそれがあの二人に知れ渡った時は――――ガタガタガタガタガタガ
「ぐっ…それもそうだ…」
「よっしゃぁ!!」
「マカ、クールに行こうぜ」
キッドはイッセーの説明に反論できずに押し黙る。そして、マカは私と戦えることに喜びテンションが上がっていた。
「決まったのかな?私の方はもう大丈夫だけど…」
「は～い今行きま～す。ソウル！いこう！」
「あぁ！」
マカとソウルが戦闘モードに入る。
「椿～よろしくね～」
『(はい！よろしくね、フィアちゃん！)』
私は椿に軽くよろしくと言う。
『(マカ油断するなよ…)』
「うん！」
どうやら、マカとソウルの２人もやる気満々のようだ。
「じゃあ～始め♪」
「とりゃあぁ!!」
――ブン！
死神様の合図とともにこっちに来て、鎌となったソウルを振り下ろすマカ。
「ふむ。いきなり来たね……けど…」
ガキンッ！
「甘くみないでね♪」
「と、とめられた！――とゆうか片手で!?」

さて…今マカが上からおろしてきた鎌の刃の部分を、妖刀を片手で持ち、空いている手で刃を掴む。――俗に言う真剣白刃取りっていうやつだよ。
「だけどこのままおせばいい！」（グググ
マカが鎌を力いっぱい押してくるがビクともしていない。
伊達に父様の剣技と迫りくる母様の凶刃から身を守る為に必死に習得した真剣白刃取りなんだ。そう簡単に破られて貯まるものですか
「う～ん…よっと」
――タンっ！　スッ
「えええぇぇ!!?」
今私がやった事は…簡単にいうと私が高く鎌にあたらないようにジャンプして回避しただけのことだ
「（普通の人間はあの状態からあそこ（マカの背の少し上あたり）までジャンプできる筈はない…やっぱり凄いな、あのコンビは……さて、マカとソウルくんのペアはフィアと椿のペアとどれほど行けるのかな）」
シュタイン先生の眼が獲物を狩る時の目の気がするが気のせいでいてほしい……
いまはいいや。さて気を取り直して
「じゃあ今度は―」（チャッ
私は刀を構え
「――こっちから行くぞ！」
――ダンッ！
刃の先をマカちゃん達の方に向け走った。
『（マカ来るぞ！）』
「うん！ガードしなｋｙ「遅い（スッ」え？」
マカがガードしようとしていたけど、もうその時はマカの目の前…
そう、私はマカの首に妖刀を押し付けていたのだった。
「チェックメイト――まだやりますか？」
「ま、参りました…」（；・∀・）

マカは手を上げて、降参のポーズをとっていた。
「椿、ありがとうございます。そして、お疲れ様でした」
「ええ、お疲れ様でした。フィアちゃん」
妖刀から元に戻った椿は、ぺこりとお辞儀をしてきた。
「……さて。今日は皆さんもう帰りましょう。特に、椿とブラックスターの2人は死武専に帰ってきたばかりなんだから、はやく家に帰って今日はゆっくりしなさい。明日もあるんですから。」
『はい、シュタイン先生』
そう言って、私たちは家に帰っていくのだった。